羽様荷香作
須藤宗方畫

雲（くも）

（續編）

大阪
樋口隆文館發行

577
4950

始

特105
221

雲

續編

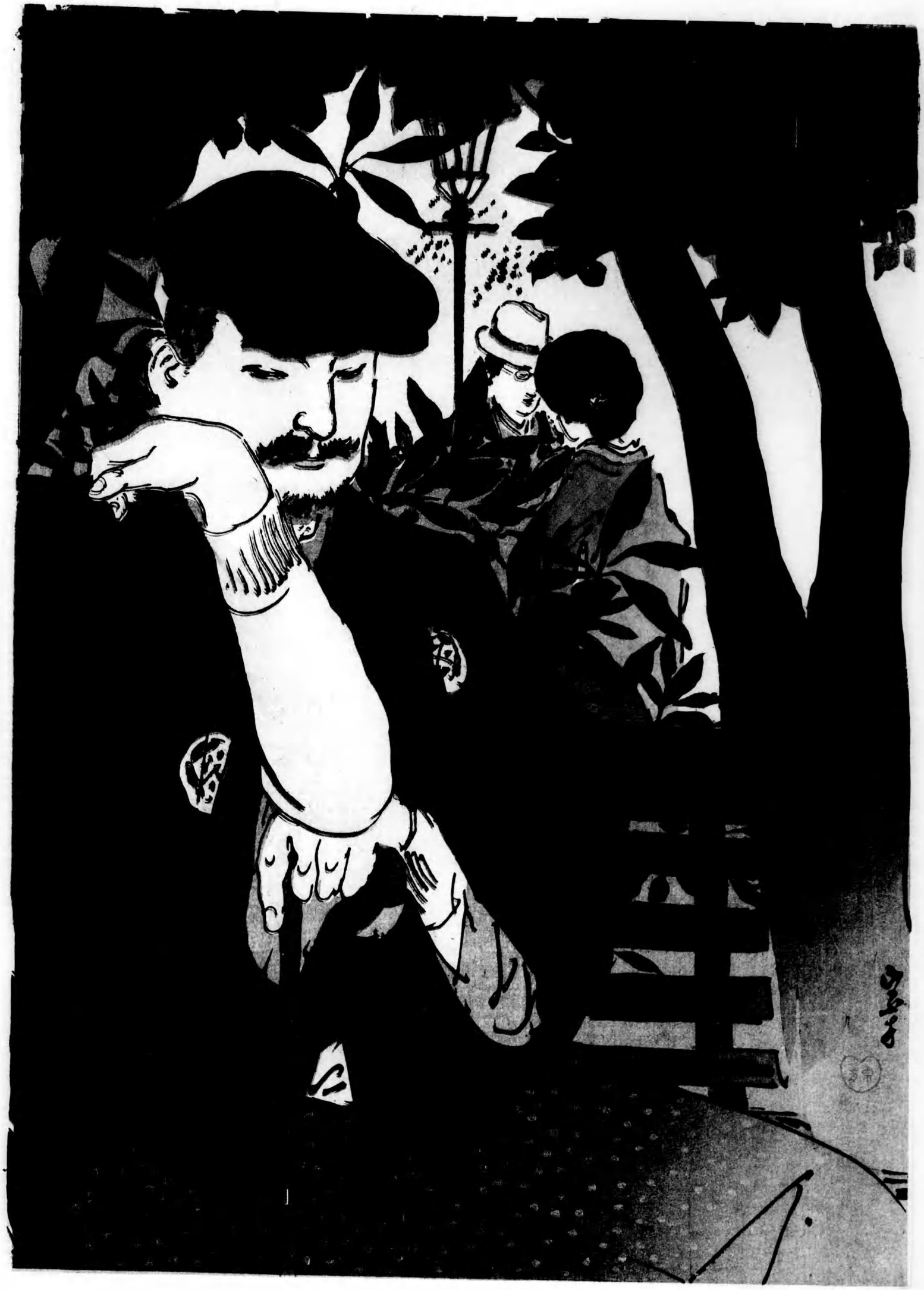
羽樣荷香作
須藤宗方畫

大正
4. 12. 22
内交

◀樋口隆文館新刊小説目次◀

江見水蔭作　大正五人女　羽織荷香作
同君作　三怪人　同君作　男命
同君作　探偵の娘　同君作　電人
同君作　泣かぬ女　同君作　武士
同君作　女賊　安岡夢郷作　罪の
同君作　純子　同君作　宵の
島川七石作　戀のしがらみ　同君作　地獄
同君作　蘭子と信吉　同君作　薄命
同君作　つきぬ縁　同君作　飛將
山田松琴作　松田大尉　同君作　殘り
同君作　罪作　同君作　操ひ
和田天華作　愛の　同君作　迷ら
同君作　犧牲の　同君作　腹が
同君作　二人の　同君作　房百
同君作　靜子　同君作　江合
同君作　弱き人　同君作　浪子
同君作　戀の意氣地　同君作　も音
同君作　人　同君作　つ髮

樋口隆文館の出版物は東西各地新聞紙上に多大の
好評を博したる物に付ご覧なれば至極面白い



雲（續編）

羽様荷香

（一）

花枝は眞島邸の門を走り出た。黄昏時で、近い天主堂の鐘がなる。それが鳴り止んだ時に花枝も立止る。二丁ばかり走つて後を見返つたが、嚴めしい門の電燈は煌々と、晝よりも明るく四邊を照らし、望月の缺くることなき一家の榮華を誇る氣に立派な甍は朧夜の高臺に聳ゑ立つて居る。張詰めた氣が一時に弛むと、モウ一歩も前へ出ぬ。其處へその儘坐つて泣きたい。泣いて泣いて泣き死もしたい。恨めしの父よと心に叫んで、唇を噛み胸抱きしめ、涙に霞む目をあげて、モ一度父の家を眺

めた時。

『オッ花枝さんぢやァ無ねか』

後の聲に我に復り、振顧くとそれは藤三郎だつた。

『オ、藤さん』

と云つたぎり、嬉しい味方に心はいよいよ弛んだが、悲しさも又激しく込み上げる。何と云つて此人に今日の顚末を告げたものか……。

『私ァ心配でならねねから、モウ一時間程前から此邊で待つて居たんで。甘い都合に運びましたかい』

他人と思はれぬ親切に對しても、他人ならぬ父の無情を何うあの儘に打明けられやう。花枝は怨めしの父ながら、その冷酷な恐しい心事を　明白に告げる事が大きな不孝であるやうに感じた。

『……有難う、貴方の深切は忘れません』

『そ、そんな事は何うでも……。それよりも早く樣子を聞かして下さいよ何うだつたね、逢へたかね、逢つて呉れたかね』

『……』

『お前さん泣いてるね』

と藤三郎は覗き込んだ。

『何で泣いてるんだね。何うしたのだ逢つては呉れなかつたかね』

『……イエ逢つた事は……父にも』

『逢つたのかね。エお父さんにも。其奴ァ豪い。ウ、其奴ァ好かつた』

我身の事にして喜び勇んだ。

『それで泣いたんだね、モウそれァ泣くのが當然だ。何と云つたつて切つて切れねね父子だもの。強い事を云つたつて、逢つて見れァ理屈は無ね筈だ。ヤレ〳〵それで私も』

とホッとする。花枝は人の眞心に對して、遂に僞りを云ふ事は出來なかつた。

『……イエ逢つた事は逢つたのですけれど……父は許して呉れないのです。妾と父

子の名乗をすることは出來ないと申すのです』

『ェッ出來ねねッて。父子の名乗が出來ねねッて。そ、それァ何ういふもんで』

『……詳しい事は歸ってお話を爲ませう。藤さん、妾モウ全く諦めました。今までの考へが間違つて居たのです。妾達の斯んな身分で、父と親子の名乗をしやうとしたのは、餘り前後を考へなかつた過失だと思ひます。イエ妾には、父は初めから無いものと……無いものとさへ諦めれば……』

花枝の沈み切つた詞の調子と、蒼白い顏の色に略想像はつく。偖はと藤三郎は躍起になつた。

『してお父さんは何と云つたね。何と云つてそんな事を』

『父は初めから、何處までも他人と云ふのです』

『ェ、他人？』

『赤の他人と云ひ切つて了つて、何を云つても聞いては呉れないのです』

『それでお前さん、其儘歸つて來なすつたのか。よしッ、今度は私だッ』

と藤三郎は駈け出す。

『あれ待つて下さい』

と花枝は追ひ縋つた。

（二）

『待つて下さい。待つて下さい』

と駈出さうとする藤三郎の袂を捉まへて、花枝は遣らじと爭ふた。

『妾モウ父の事は諦めました。御親切は忘れませんが、此儘萬望……』

『可けねね。お前さん、そんな事を云つてお袋を何うするんだ。死にかゝつてるお袋を何うする氣だ。畜生ッ、お前さんの父さんだが、餘りな仕方を爲やがる。私がモ一度行つて賴んで見て、それでも業突く張な事を吐しやァ、此方にも覺悟があるんだ』

母を何うすると云はれては、堅い決心も又鈍る。母を安らかに目を瞑らせたいばつかりに、父の邸へ赴いなのでは無いか。

『オッそれからお前さんあの書付を何うしたね。あれを父さんに見せたかね』

『イエあれは持つては來ましたけれど……それもモウ見せずに歸りました』

と帶の間から取出したのは、三味線の胴から現はれた、花枝の初誕生を祝ふた、浩造自筆の書付であつた。藤三郎はそれを手に取つて。

『これは私に暫らく貸して下さいよ』

『……妾モウそんな物は要りません、破つて捨て了つて下さい。藤さん』

と聲は沈んだが明瞭と、涙を拭いて決心を語る。

『母をあの儘で死なすのは、妾も死んで了ひたい程殘念ですけれど、此上父に縋つたら、却つて母に耻辱を與へるやうなものですから、妾斷然と諦めました。世間には生れぬ前に父親が居なくなつて、一生親の顏を知らぬ不幸な人もあるのですものそれに較べたらまだ妾は幸福です。妾母が居なくなつたら、立派に獨りで身を立て

……屹度今の耻辱をそゝいで見せます。その時には妾の方から縋らなくても、父も名乘つて呉れるでせう。妾之から母に其決心を話して、得心させて死なせませう……』

『耻辱と云ふのは何う云ふ譯だね。何も耻辱になる譯は無いぢやないか。先方こそ義理人情を知らねね……』

『さあそれは左樣ですけれどね、先方はあの通りの大富豪、此方は見る影も無い貧乏人の悲しさ……。何か父子の緣を云ひ立てゝ、金にでもする爲に來たやうに云はれて……妾眞實口惜しい……口惜しい目に逢ひました』

思ひ出しても情ない、無情の父の詞を其儘告げたら、氣を負ふて立つ藤三郎が、憤つて邸へ飛び込むのは知れた事であると、隱さうとすれど涙は包めぬ。顏を反けて始終を語つた。

藤三郎も涙を拭いて。

『チョッ忌ま〳〵しいなア。まあ可いや。又歸つての相談だ。大分遲くなつ了つた

お袋の事が氣がゝりだから、お前さん俥で早く歸りなせい。私もスグ後から電車で行くからね』

花枝は勸めらるゝまゝに俥に乘つたが吳々も眞島の邸へは此上交渉も何も爲ぬやうと賴んで去つた。

それから十分ばかりも經つて後の事である。藤三郎は阪下の關東煮の荷店に立つて、頻りに大きな物で熱燗を引かけて居た。胸の鬱勃を酒に忘れやうとてか……』

（三）

關東煮屋の前を去つた藤三郎は、再び眞島邸の方へ引返して來た。明るい門燈の光りは彼の酒氣を帶びて赤い顏を照す。

『……可愛想だ。可愛想だッ。俺ア此儘にしちやア居られねね』

と獨語ながら、まだ開いてあつた小門の方から、一寸中を伺ふとズン〳〵と入つて行つた。玄關には來客と見ねて下駄が一足。邸内は寂寞として、園庭を隔ての生籬の上から、枝を伸した老櫻が頻りに花の雪を降らす。

『オイ賴むよ、誰も居ねねのかッ』

腹を決めた藤三郎は初めから喧嘩腰で聲の限りに怒鳴り立た。普通の手段では難かしいと覺つて彼は浩造を捉まへて花枝の宅へ引そびいて行く目算らしい。

『誰だい、大きな聲をして』

と奥の方から出て來たのは、此前一度脅かされて、藤三郎の顏を知つて居る周章者の書生吉岡だつた。

『はゝはゝゝ又お前さんかね。此間來た魚屋の藤さんだ。角藤さんだよ。お前早忘れはしねねだらうね』

『アッ君か』

と吉岡はそろ〳〵周章て出した。

『君だよ魚藤君だよ。さ分つたら取次いで吳んねね。今日はお孃さんぢやア可けね

ねんだぜ。主人の眞島浩造さんに面會に來たんだ。可いかね、下手に周章て此前のやうな頓馬な事をすると承知しねねよ』

初めから高飛車に出られて眼を白黑させだが。

『君、賴む。賴むよ君。君の爲に僕は何と云つて叱責を受けたと思ふ。君が此玄關へ現はれて怒鳴る度びに、僕の運命は縮こまるやうだ。大きな聲をして呉れたまふな』

『それはお前が眼先が見ねねからよ、斯な碌でも無ね邸で食客をするからよはッはゝゝゝ。何でも可いから早く取次ぎねね』

『取次ぐと云つて……困るなア君』

『何が困るんだ。お前お客樣を取次ぐのが役目ぢやア無ねか』

『そ、それが君。今夜は眞實お不在だからね。御主人は居ないんだから』

『左樣かね』

と云つて油斷の横面に、突然藤三郎の板のやうな平手がピシャリ。

『ア痛ッ』

と悲鳴を上げて尻餅をつく。其身體を踏み跨いで。

『主が主なら家來までだ。此處の奴らア揃つて嘘をつくんだな。居るか居ねねか突止めて遣つて來たんだい、俺が行つて』

疾風の如く奥を目がけて駈け込まうとする。吉岡は遣らじと抱きついて。

『そんな事をしたら僕が叱られるから』

『エ、邪魔を爲やアがるなッ』

胸を突かれて板の間に音をさせ、ドッと再び倒れる隙に、阿修羅の如き藤三郎の姿は、襖障子を蹴飛ばして、遮二無二奥へ消ねて了つた。

（四）

唐津夏彦は、此頃では殆んど眞島の家族のやうにして、繁々と出入をして居る。

浩造は非常に夏彦を信頼して、男爵邸へ復歸の運動も引受けて居る樣子である。今夜も夏彦は訪ねて來た。奥の主人の居間へ通されると、晩酌を始めて居た浩造は、そこ〳〵にして面會する。

『若樣、お越しを待つて居ましたよ。あの龍岡の口ですな。喬子に同情して下さつて、若樣が御盡力下さるから、何やらあの島中尉も足が遠くなつたやうで』

『はゝはゝゝあの狂人の島奴來んやうになつたですか。此前の時なぞは思ひ切り罵つて遣つたですからね苟くも軍人と名乘る身分で、未練極まる行動をする。龍岡が愚痴の醜態を演ずるなら、汝が友人の義務として之を諫めるのが當然ぢやないかそれに反つて龍岡の爲に賴まれて眞島さんを苦しめやうとするのは言語同斷だ。恥辱を知らんかッて、散々罵倒してやつたですよ。彼奴あれで參つたと見ねるはゝはゝゝ』

『それに私は一切若樣に委任してあるからと云つて避て居ますからね』

『ナアニ所謂猪武者で、智惠だとか計略だとか云ふものは一切持合せないのですからね。戰爭が無かつたら眞に無用の長物で、困つた代物ですよ、あんな連中が束になつて遣つて來たつて、私が此舌頭で飜弄してやるです。決してお氣遣ひには及ばないです。枕を高くお寢み下さい』

『お詞で私も安神をして居ます。喬子も御深切を喜んで、若樣がお越しにならぬ間は、何だか不安で可けないと云つてね。まだあれから外出もしない樣子ですが』

『それが要らぬ事ですよ。立派な正當な原因があつて、それで婚約を破棄するのに誰に遠慮が居るものですか今後から私が一緒に出ます。乾度保證を加へてお連れするから、それも御安神下さい。この面白い春に反いて、あの活潑な氣象を仰へつけて、家に引籠らせるなぞは實に殘酷です。籠に伏せられた小禽の運命を、喬子さんに強るのは殘酷ですからねね』

『有難う、若樣の御同情で喬子は蘇生つたやうなもので。此後とも何分よろしく、あればかりは私此財産にも換へられないはゝはゝゝ子と云ふものは又別なものですな』

頻りに談話を續けて居ると、俄に人の立騒ぐ物音。縁をバリ〳〵走つて來たのは女中のお仲で顔色を變へて居た。

『何だ、何うしたのぢや』

浩造が審かれば夏彦も起ちかける。

『大變でございますよ。あの此間參つてお嬢樣がお逢ひになのた魚屋の藤三郎とか云ふ男が、今夜は大旦那樣にお目にかゝるんだと云つて、吉岡さんやら皆で制止て居るのに、暴れて此方へ入らうとするのでございます』

『何だ魚屋が？』

一可。私が行つて警察へ引渡して遣る。眞島さん、御安心なさい。春先は島のやうな狂人が多いのですからねはゝはゝゝ』

夏彦は音する表の方へ急いで出て行つた。三間ばかり隔たつた應接室の外の廊下で二三人の若者を相手に、藤三郎は拳を振廻して暴れて居る最中。

（五）

『お前さんが當家の大將の代理と云ふんだね。よし。代理なら話を爲やう』

と應接室の中央で、今の騒ぎに倒れた椅子を蹴除けると、尻を捲つて胡坐をかいた。藤三郎は暴れた爲に、自暴に煽つたコップ酒の醉を發して目の色まで赤くし、主人の代理だと云つて自分を取鎮めにかゝつた、夏彦の面を睨み据ゑて云つた。

『話は靜穩にしても分る。聞くから云ふて見るが可い』

と夏彦は椅子を起して腰を掛けた。

『ヘン厭に落付いて勿体ぶつたつて駄目だよ、俺の方のやア腹を決めて來て居るんだからね。其積りで物を云ふが可い』

『お前は一体何だ。令嬢や主人に強て面會を逼つて。甚だ穩かで無いぢやないか。猥りに人の家宅に侵入すると法律上の制裁がある事は知つてゐるだらうね』

『酒落たことを吐かしあがるなッ』

と大喝すると、雲龍躍る片肌脱いで、手の屆くまで身を進める。

『法律つてものは金持ばかりを護る物ぢやア無ねや。貧乏人にも味方をするのが依估貪屋のねねお上の法律だい、べら捧奴エ。猥りに入つたか入らねねか、法律に聞いて見ろ。お上の法律に聞いて見れア分るんだ。サア明るい所へ出るのは此方の望みだ。出やうぢや無ねか、出て白黑をつけて貰はう。サア來いッ』

層にかゝつて強く出られ、夏彦は案外だつたので一寸周章てた。

『イヤ話をして分る事なら強て事は好まない。何ういふ用件ぢや云ふて見るが可い』

『何を云つてあがるんだい。話さうと云やア脅しあがつて、脅しが利かねねと又猫撫聲をしあがる。オイ頼むよ。此方は正直眞法だ。お前達のやうに嘘や權謀は微塵も無ねんだからね。腹を割つて物を云ひねね』

肌を入れて腹掛を探り、花枝から預つた書付を取出すと。

『最前此邸へやつて來た、花枝と云ふ可愛相な娘の事に就て、大將に逢つて交渉ひてねのだが、お前が返答が出來れイ相手は選ばない。あの娘を大將は何うする氣だそれを先聞かして貰はうか』

『娘を？。娘が何うしたと云ふのかね』

『ヤイ呆けちやア可けねねせ。お前大將の代理だつて何も知らねねのかい。娘つたら花枝さんの事だい。當家の大將の實の子の、水野花枝ッて云ふ娘の事よ』

『大將の實の子で水野花枝？』

と夏彦は怪訝な顔をしたが、スグ頷いて。

『ウムあの事か。あれをお前は何うして吳れと云ふのねね』

『何うも斯うも無ね。立派に父子の名乘りをして貰ねてねのさ。當然ぢやアねねか死かゝつてる母親に安神させてねばつかりに、態々尋ねて來た現在の實の娘に對して、何と云ふ非道な事を爲あがるんだい。女乞丐だの貧乏人だのと、云ひてね放題な恥を搔かせあがつて。誰があの母子を貧乏人にしたんだ。イヤサ乞丐同樣な目に

逢せたなア誰の罪だい。悉皆義理人情を知らねね當家の大將の爲た事ぢやア無ねかッ。何の緣故も無ね他人の俺でさへ、氣の毒な母子が見て居られねねから、骨を折つてやる氣になるのに、血を分けた父子で居ながら、優しい詞の一つもかけることか、沒義道に恥辱を搆かせて突出すとは何の事だッ』

聲は涙と共に迸る。

『荒立てたくねねから穩和に出れア、女と侮つて踏みつけた事を爲あがるから、水野母子に代つて俺が談判に來たんだ。グッとも云はせねね證據の書付を握つて居るんだ。さ此通り證據を持つて遣つて來たんだ』

『証據と云ふのは眞島さんと、その水野とか云ふ母子の者との間を証明する証據かね』

『知れた事だッ』

『夏彥は何を思つたか、立つて扉の締りに注意し、椅子にかけると今度は詞も態度も改めた。

（六）

夏彥は何を思つたか、急に詞を和げて。

『左樣かね。そんな物を持つて來たのか。では見せて貰はう』

と手をのばす。藤三郎は書付を握つた手を振つて。

『オット可けねね。手渡しは滅多に出來ねね。人を欺したり嘘をつく事を何とも思はねね大將だから、その手先のお前さん達に油斷は出來ねねや、そこから見なさい』

書付をひろげて讀み上げる。

『……花枝の初誕生の日、祝ひの印に封じて贈る……と可いかね之が之句の尻へもつて來て、父浩造さ、此家の大將の名前の浩造だ何と立派な證據だらうがね』

『フム自筆だね』

『御念には及ばねね。之を書いて渡したのが大將で、受取つたのが水野芳枝ッて花枝さんのお母さ。俺の子に相違御座なく候と書いたも同前、公正證書よりも確な一札さ。此方には斯んな立派な證據があるんだぜ。それを表向きにして掛合ふといふでもなし、母親の手一つで娘ひとりをあれ迄に育て上げるには普通大抵の苦勞ぢやア無ねのを、意地の強い女だから腹に泣いたつて涙も見せねで、二十年と云ふ長い間を凝と齒を喰しばつて女の道を貫いたのだぜ。ヤイお前大將の子分なら、大將と同じで血も涙も無ねのだらうが、人間の心を備へた者なら、これだけ聞いても大抵は泣かされるぜ。それによ。娘の花枝てねのッが此お母に劣らねね確かり者で、病氣のお母を手の掌に乘せる孝行さ。誰だつて賞めねね者は無ね位だぜ。髮や衣裳に憂身を窶す妙齡でもつて、大道に立つて三味線を彈いて、女乞丐と嘲れたつてそれをお母に隱して生計を立て來た確かり者だ。その氣性だから今度だつて、之がお母の望みだからこそ、恥辱を堪へて大將に賴みに來たんだそれに……それに酷い仕向けをするばかりか、赤の他人だと云つて追出すとは何と云ふ眞似を爲あがるんだ

父子ぢやア無ねか。切つても切れねね父子ぢやア無ねかッ。此書付で爭ふ日には、何處へ出たつて勝てる喧嘩だッ』

夏彥は默つて聞いて居たが、此時ポケットから半巾を取出して、そつと眼を拭ふた。

『イヤ能く判りました。實に其の芳枝といふ婦人にも、花枝と云ふ娘に對しても、私は同情に堪へない。左樣云ふ事は全く初耳でした。眞島さんもそれを聞かれたら』

『聞く段ぢやア無ね自分で逢つたのぢやア無ねか、逢つて置きながら赤の他人と』

『イヤそれは事情がある。そこは察して貰はなければ。既に奥樣も居られるし令孃もある。今そんな事が……そんな實子と名乘る者が突然現れたと云ふ事に就ては、之は眞島さんにとつて非常の事件であるから。そんな事で表面だけは苦痛を忍んで故意と冷酷な待遇をされたのだらうと思ふ。それた違ひない、其點は察して貰はなければ』

『可けねね〳〵。今になつてそんな事は可けねね。底も蓋も取つて了つて直談判だ親子の名乘をするのが嫌なら』

『左樣大きな聲をしないやうに。私も代理として入つた以上は決してお前達の不利益になる樣な事は爲ない。殊に非常に同情するからね。之れは斯うしたら何うだね』

夏彦は熱心を面に見せて詞を續ける。

（七）

花に涌立つ喧騒を鎭めて、音せぬ春雨が朝から降つた。

湯に行つた玉子は、途中で一緒になつた朋輩の福次と云ふのを連れて歸つて來た茶を注れて話に耽る。隣家の稽古三味線が、雨氣に籠つた水調子。緣でこそあれ末かけてと、悲しい戀の歌の文句に、しつくり添ふた廓の氣分。揚子で刺した羊羹を

鉢に落して恍惚と。

『佳いわね。身に染みるわ』

『ほゝほ素人のやうな事を云つてるのわ。幾つになつたらその道樂が止むだらう』

と玉子は笑つた。福次は名前の福に緣遠さうな、痩た肉を白粉で焦いて、目の緣に黑い暈。永い川竹の女ど知られる。

『又あんな事云つてるわ。妾一生此稼業さ。何うして斯んな面白い商賣が止められるもんかね』

『暢氣だわね。羨ましいわ』

『羨ましければお仲合をお爲よ。一緒に何時までも行うぢやないか。三味線を杖にするまでさ』

『可かつたね。三味線小町？』

『卒塔婆よりか氣が利いてるわね』

『妾何して斯なのだらう。戯談にもそんな事思はないのよ。厭で厭で仕樣が無い

わ』

『藝妓が？。冥利に盡きるわ。罰が當つてよ』

『當つたのか知ら……。鬱々し了つて。モウお座敷なんか出る氣にはなれないもの』

『ほゝほゝそれは罰ぢやなくつて毒當りさ。あの毒は强いつてね』

『あの毒つて何有？』

『白ばつくれで無いよ』

と一寸眺んで。

『此頃は見ないのね。不在？』

『唐津さん？』

『オヤ〳〵。すぐ名前が云つて見たくなるから厄介ね。何したの。何處へ行つたの』

『何處だか分らないのよ。消息もしないんだもの』

ホッと太息して顳顬のところへ長煙管の口。膝を立て物案じの風情で居る。

『藝妓の戀煩ひが出來たら、珍らしいから屹度大學病院からでも買ひに來るだらうね、參考に欲しいつてさ』

『知らない。そんなのぢや無いからさ茶かさないで聞いてお呉れよ。妾本統に心配して居るのだから。だつて詰まらないものね今になつて……』

『見捨られてはかね、それは詰らないけれど。そんな事もあるまいけれどねね、併し油斷は出來ないわね、相手が大分豪いのだから。そして御華族で男爵つて、そのお邸へ歸れるやうになつたの』

『その事で出て居るのだけれどね。そこに種々な事があつて、妾氣を揉んでるのさ』

『許嫁のお姫樣でもあつて、十種香見たいになるのぢやないの』

『何になるんだが、末の事を思ふと心細くなるわ』

と憂ひに堪へぬ身を起して、緣の柱へ儘れると、思ひに似たる雨も亂れて……。

（八）

玉子が氣遣つて居た夏彦は、其日の夕暮に威勢よく俥で歸るとスグ按摩を呼んで肩が凝つたと云つて大騒ぎをする。二週間ばかりも顏を見せなかつたのを、斯云つて如彼云つてと種々に怨みの詞を復習へて置いたが、サテ膝を合せると妙に嬉しさの力が勝つて、半分ほどの不足も云へないのを、これも戀かと玉子は我身を可笑しがる。

『それでも能く方角を忘れなかつたのね。交番で聞いたの』

『聞いたさ。私の魂の預けてある所は何處かつて』

『ほ。魂幾個あつて？』

『左樣さな。魂の本店は神樂阪の玉子と云ふ美人の所に置てあるがね。支店は駿河臺の』

眞島と云ひかけるのを膝をブツリ。

『御馳走樣。それがお土產なの』

『オイ歸る早々虐待すると罰が當るよ。此二週間の辛苦經營は慘憺たるものだつたせ。お話にならない苦勞をしたんたせ』

『ほゝほゝゝゝ何だかねね、喬子さんでしたかね、眞島の嬢さん。あの方に聞いて來ませうか』

『詰らない事を。その喬子で骨を折つたのぢや無いか』

『馬鹿々々しいねね』

『まあ左樣云はないで報告を聞くさ。玉子、大分巧く進んで來たよ』

『喬子さんとの？』

『喬子々々と云ふな。喬子は手段ぢや無いか。知つてる癖に』

『だつて考へると馬鹿らしいわね。そしてあの間喬子さんの所に居たの』

『まあ居たり居んなだり、複雜巧妙神出鬼沒と云ふ大活動を演つて來たのだ。其結

果としてさ』

と夏彦は愉快氣に笑みを湛へつゝ。左の掌を握つて前へ出す。

『オイお前、此掌裡には何が入つて居ると思ふね』

ツイ魅了られて玉子も笑顔。

『今賣出しの大紳士、百萬圓長者の眞島浩造一家は、主人は初め妻君の元子、それから令孃の喬子から下女下男の奉公人まで、悉皆この私の五本の指の中に封じ籠めてあるから豪からう。先づ此指一本が十二萬圓の價値がある。一本切つて遣らうかね』

『そんなに巧い都合に運んだの』

と睜る目の前へ膨らんだ紙入を

『お前から輕蔑された私の紙入も、此通り主人と共に急に貫目を增した譯さ、唐津夏彦樣の御運も何うやら開けかゝつて來たよ、喜びな』

『左樣』

膝を乘出すと。

『現金な聲を出すぢやないか、はゝはゝはゝ』

『そして孃さんと龍岡つて云ふ人との婚禮は何うなつて』

『そんなものは滅茶々々さ、鎧袖一たび觸れば』

と重い紙入は女の膝へポンと投つて載せ。

『玉子、男爵夫人になるお稽古を始めな』

（九）

『そんな氣休めなんか聞きたく無いわ。それよりもお孃さんが氣がゝりよ。龍岡つて云ふ人との結婚が中止になつたつて、それから何うなつたの』

『それからはまだ何うもならぬ。龍岡の奴め今に狂人になつて、瀧にでも飛び込む

位が落だらうさ。眞島の娘は大喜びで、モウ第二の男を探してるよ』

『訴しいわね。相憐れだつたつて云ふのに』

『だから私の手腕を見て呉れと云ふのだ。龍岡は戰地で大負傷をして、二目と見られぬ顏になつて歸つて來たのだ。それを知つたから先づ喬子の兩親から脅かして置いて、夫から本尊を捉まへて、充分に恐怖を抱かせて遣つたんだ。すると何と云つても我儘に育に上げられた成金のひとり娘さ。戀だとか愛だとかは、小說の口繪と同やうな、極彩色の美しいものに限ると思つてござるんぢから譯は無い。厭氣が充分にさしたところで、龍岡を見せると其顏だらう。ワッと云つたのが緣の切れ目よ妾を助けると思つて何うかして呉れつて手を合はせて拜まれる。そこへ持つて來て』

『一寸お待ちなさいよ。孃さんが手を合はせて賴むのね。賴まれて何したの貴郎は妾それが聞きたいのよ』

『はゝは變に氣を廻はしたね、詰らない。が併しあの娘はお前と俺との爲には幸福

の神樣だ、あの娘を人質にして、直島浩造に深酷な復讐をしてやるのは俺の最初の計畫だつたが、それが思ふ壺にはまつて來たから愉快だ。それにモ一つ面白いのはね、嬉のことで出入りをする中に、計らずあの老爺の大秘密を握つて遣つたのさ』

話の中ばへ夏彥を訪ねて來た者がある、それは俥夫の銀次だつた。夏彥は急に相談したい事があると云つて彼を招いたのであつた、奥の一室で兩人は密々と語つた。

『するとその魚屋の藤三郎つて野郎が大事な書附を有て居るんですね』

『左樣、それを此方へ卷上げやうと云ふのだ、銀次、お前それを遣ッつける事が出來るかね』

『旦那のお賴みなら火水の中へでも飛び込む覺悟で居やすから、それ位の事は譯はありませんよ、やッつけませう』

『併し汝の安請合には手を燒いて居るからね、又龍岡の時のやうな失敗をやつちや困るせ、あの失敗を償ふ積で一番褌を締めてかゝつて呉れなけア困る』

『可うがす、旦那今度こそは大丈夫、屹度その書付を手に入れて見せやせう。

（一〇）

銀次は何事かを請合つて、酒を饗ばれて歸つて去つた、態と外して居た玉子は、夏彦と對座になつて、互に醉ひを貪りつゝ語る。外はシツポリと降つた。

『あの浩造のやうな奴に斯んな秘密があらうとは意外だつたよ、奴め絶對に秘密にして居たのだが、そろそろ曝れかけて來て、然も秘密の鍵を俺が握つたから弱つて居やがる』

夏彦は藤三郎から聞いた芳枝母子の事を玉子に話した後で斯う云つた。

『すると芳枝だつて東京の藝妓だつたのね』

『左樣らしいよ、浩造の奴め落藉して此方へ連れて歸つたんだね、それを何うして別れたんだか、其處までは詮索をしなかつたが、俺の想像ぢやア今の嬶アの元子ね

彼女は大河内子爵の妹だから、彼女を貰ふと云ふので、捨てゝ了つたのに違ひないよ、そんな事はあの老爺には平氣だからね』

『藝妓と聞くと同情するわ。可愛想に捨られた母子は何して居るの』

『今云つた通りで、弱つて居るらしいよ。これも俺の考へぢやア尻押しする奴が居つて、拵へた狂言かも知れないが、其母親の芳枝つてのが大病で死にかゝつて居るから、息のある中に娘と母子の名乘がして欲しいと云ふのだ』

藤三郎つて云ふのは何。花枝つて娘さんの亭主！』

『左樣だと思つたら違ふらしい。全く母子の難義を見兼ねて飛込んだと云ふんだが江戸ッ子と云ふ周章者にはそんな奴が居ないとも限らない。それとも娘が美い容色で、それを狙つた狼かも知れないが』

『娘を狙ふ狼ならそこらにも居るわね』

『馬鹿な。まだそんな事を云つてるね喬子の事をお前は疑つてるね。彼女はお前と俺との大事業の道具ぢや無いか。一方では金より大切がる娘の死活を握つてさ。一

方では浩造自身の秘密を取つて押へて遣つたら、モウ占めたものだ。あの大資産の大黒柱は俺とお前の兩人の樣なものだ。眞島家を倒さうと起さうと此方の方寸だ。

さうなるとお前が足を洗ふことなぞは問題にならないからね。男爵夫人の稽古といふのはそれさ。浩造奴俺が恐ろしいから、屹度親父に運動して邸へ歸れるやうに骨を折るのは極つてるからね。何うだい、僅た二週間の仕事で、此だけの事を遣付けて來るのだから凄からう」

「眞島さんは何う云ふの」

「何うも斯うも無い、震ひ上つてるさ。左樣して幾千金が費つても可いから、秘密の證據を卷上げて呉れと云ふのだ。藤三郎つて奴の持つて居る父子の證據になる書付を奪つて呉れと云ふ賴みだ。其賴みに止むを得ず、と云つた態度で實は此方の事業を進ませて行くのだから豪からう。我ながら何して斯うも智惠が有り餘るのだらうと思つて敬服してるよ」

「ほゝほ急に氣が強くなつたのね。だつて妾嬢さんてものが居るだけに心配よ。此方の道具なんて氣休めを云つて置いて、馬鹿を見せられるのぢやア無いかと思つて」

「ヘッ鷹は飢ても穗を啄まずさ、浪人すれど唐津夏彦だ。お前に見かへる何が有るものかほゝはゝゝゝ」

（一）

花の闌れた公園の夜は、若葉を照す電燈の光にも、モウ初夏の影が見られる蛙の聲の寂を滯て、微に緩く傳はるのも、春を弔ふ歌とか聞かれる。

森林を摸した幽寂しい丘の前に一臺の腰掛がある。其處には一人の巨漢が眠る樣な姿勢で腰をかけて居る。それは先刻電車を下りた島御堀であつた。

御堀は此日も眞島邸を訪問した。朴の木齒の書生下駄を轟かして、彼の足は幾度とも無く眞島邸の土を踏んだ。がその度に不得要領で空しく引返した。

初めの間は二三度主人代理と云ふ唐津夏彦が面會した。けれども其云ふ言が眞逆浩造や喬子の口から出た事を其儘取次ぐものとは信じられぬ。敬三が負傷の爲に醜い顏になつた。それを嫌つて喬子が結婚を拒むと云ふのである。本人の意思に逆うての結婚は、終生不幸の基であるから、婚約をしない以前と思つて呉れと、之が浩造夫婦からの傳言と云ふのである。假令之が眞實であるにしても、斯樣な重大な事件を、夏彦如き輕薄な、人格の低い信用の出來ぬ男の口から聞いて置く譯にば行かぬ、直接に面會を避ける人人の眞意を、其口から聞き得る迄は何度でも足を運ばうそれ位の事は何でも無い。果して喬子の心が敬三に反いて居るのなら、それを諫めて以前通の戀を兩人の間に繋がうとさへ決心して居るのである。それで無ければ我は龍岡母子に會はす面目は無い。敬三が失戀の惱みに生きながら死せるが如き有樣で居て、有爲の前途を過つ情ない狀態を見るに忍びないので、決して惡意で無い、虛言を吐いて一時を糊塗して置いた。その責任からも此事件を圓滿に解決し、めでたい新夫婦の緣を結ぶのは自分の義務である……。

御堀は此目的を貫く爲には、自分が處世上の信念たる、人間唯誠實あるのみ唯一の武器に、飽くまで鬪ふ覺悟で殆ど毎日眞島の邸に通ふたのである。けれどもそれは何の甲斐も無かつた。今は參謀本部附の、軍務に疲るゝ身體を、暇さへあれば遠方へ運んで、憤怒を制へて玄關に立つのであるが、モウ夏彦さへも逢はうとは爲なかつた。主人不在の一點張りで、相手にすることも出來ぬ書生の冷淡な取扱ひに無念を堪へて悄々引返す……。

『今日で二十遍ばかり通つたな』

と云つた御堀の顏は、葉越の電燈に青かつた。

『遂に誠意を認める事が出來ん……。手を飜せば雨となり、手を飜せば風となる、人情の反覆常に斯の如しか……情ないなア』

輕薄な世態と人の心に平かならぬ彼は悶々の胸を抱いて獨り淋しい腰掛に憩うた暫時沈默に耽つて居ると、遙かに自動車の喇叭が聞ゐる。何心なく其方を眺めると公園の入口で停つたらしい、强い瓦斯ランプの光が輝き、二筋明るい芝生の上を、

男と女の二つの影。此方へ漸次に近づくのが見ねる。

（一二）

人來ると見て御堀は腰掛を離れた。人を見るさへ不愉快なほど、彼の心は悶ねて居た。太い洋杖を取上けて、出口の方へ近づく男女とは十歩ばかりの距離になつたが、兩人は御堀に氣附かぬらしい。睦じ氣に寄添ふて、話を止めずに前へ來た。御堀はフイ男の笑ひ聲に立正まる。聞いたやうな聲だつたので、誰だらうと透して見ると忽ち驚いた体で、急いで暗い木の下闇に身體を沒した。

御堀を驚かした男女は、一寸立止まつて四邊に氣を配る樣子。男が何か云つて手を取ると、女は引かるゝやうにして一緒に腰掛に掛ける。

『初夏の夜の星の空、すゞしくそよぐ風の音は、神のかなづる玉琴に、觸れてやひゞく天の樂、はゝはゝゝゝ左樣でしたねね喬子さん』

『まあ能く記臆していらつしやるのね』

『忘れるものですか。今夜の散歩と共に、一生の追懷になるのですからね』

『何だかこれ限になるやうなお詞ねね』

『イモ左樣ぢや無いですが、第一印象と云ふものは格別に追懷の種になるですからね、今夜は充分にその種を蒔きませうかはゝはゝゝゝ』

『ほゝほゝゝゝ』

『厭ですか』

『知りません』

男は夏彦女は喬子、木蔭に潜む御堀は全身を震はせた。

『私は其積で自動車を返したです。お父樣の許しを得て、イヤお父樣から賴まれて貴女の外出に付添うて呉れと云ふのですから、誰に憚る事も要りません。左樣でせう』

『それは左樣ですとも。だつて父があんな事お賴みして、貴方怒りはしなくつて』

『怒る理由が無いぢやありませんか。私はお父様の好意として、實に感謝するです保護して呉れと云はるゝのは、即ち貴方を私に許すと云ふ意味でせう、私は左様解釋して居るですが違ふでせうか、エ喬子さん、私の解釋はそれですが違ふでせうか』

と左も仰山らしく女の顔を覗き込み。

『萬一之が違つたら、之が私の自惚だつたら、私は第二の龍岡敬三たらんければならぬ』

『あれ又そんな事を……。そんな人の名云はないで下さいつてお頼みしてるぢやありませんか』

怨じるやうな艶めかしい聲。

『はゝはゝゝゝ、けれども今云つた第一印象ですからねゝ彼の男が貴女の』

『モウ厭ッ』

と押へるやうに手を膝へ、其手へ男の手も重なつた。

『そんな話止して……妾の爲に考へて下さいよ。妾世間にも……お友達にだつて顔を見られるのが極りが悪いもの。ね左様でせう。あんな事になつて招待の案内狀まで配つたんだから』

『だから私が早くから警戒したのだけれど、其頃はお父様も貴女も私を信用して下さらなかつたから』

『だから妾許して下さいつてお詫してるぢやありませんか。貴卿まだ許しては下さらないの』

『さあ何うですかね。うつかり許して油斷すると私も又龍……』

『モウ』

と云ひさま白い手は、男の口を押へにかゝる。爲せじと防いで。

『私が許せば貴女もですね。今夜はそれを決定しませうか』

（一三）

人無き夜の公園に、密會の男女を夏彦、喬子と知つて、腰掛の後に近い木蔭に隱れた御堀は、暫時は呆れて茫然とした。手に取る如き艶めかしい私語は、聞くに堪へざる色魔の聲である。

夏彦が自分を拒んで、喬子に面會させなかつた事情も之で判つた。學校時代から放蕩兒で聞こえ、不品行で軍職を剝がれた彼は、今は遂に良家の處女を弄ぶほどの色魔と墮落したのであるか。喬子を獲んが爲に眞島家へ取り入り、親夫婦を巧に瞞着して、今は既に目的の餌に恐ろしい爪牙を觸れて居るのである。それにしても喬子が敬三を嫌つたと云ふのは、夏彦の誘惑の爲であらうか。それとも喬子自身の意思であらうか。聞けばそれも判るだらうと御堀は躍る胸を擦つて立すくんだ。

『では私との結婚を承諾して呉れますね』

『妾からこそ……』

御堀の手に持つ洋杖は細かく震動へる。

『そして妾……妾貴郎にお願ひよ。早くお邸へ歸つて下さいな。歸つてそして何したら何んなに愉快だらうと思ひますわ』

『邸へですか。無論です。貴女のお父様も如彼して其事に就て骨を折つて下さつて居るのだから、それに父も今では後悔して居る樣子ですからね私が斯うして眞面目にして居るのを知つたら喜んで迎ひに來るだらうと思ひます、私と貴女を迎へるに極つてるですよ』

『左樣だつたら妾』

と喬子は嬉しいと云ふ表情を、美しい顏を染て見せる。

『貴女は喜んで呉れますかね。男爵夫人に滿足して呉れますかね』

『妾早く左樣なりたいわ』

『軍人で無くても可いですか』

『又あんな事を……。そんな事聞くと妾侮辱されてるやうな氣がするわ、後生だから止はずに置いて下さいよ』

『たつて私としては充分念を押さなければ不安心ですからね。喬子さん貴女此處で誓ふ事が出來るでせうね』

『誓ふつて何んな事？』

『龍岡の事をです。奇麗に斷念したと云ふ事を誓つて見れませうね』

『ほゝはゝゝ斷念つて訝しいわ。初めから妾に愛なぞ無いぢやありませんか。妾欺かれて居たやうなものよ。不具者見たいになつて、それを妾に隱して居るんだもの』

『それは龍岡にして見ると、貴女の愛を繫ぎたいばかりに、隱して知らせなかつたのですよ。寧ろ貴女を愛する爲めに』

『モ可ございます。妾龍岡つて人知らないから』

『貴女が知らんと云つても先方が忘れなかつたら何うしますね。現にあの島の奴、

毎日のやうに來て居るですよ』

『だからそれは貴郎が引受けて遣ると仰有つたぢやありませんか。モウそんな事云つて妾を脅すのは厭。妾それよりか他に心配な事があつてよ』

『何です心配つて。喜憂共に分たうぢやありませんか』

『……だつて貴郎の事よ』

『私の事？。私が何うかましたか』

『ほゝゝほゝゝゝ。だつて貴郎は……。貴郎は花柳社會の女なぞに關係は無くつて』

『花柳社會の？』

と夏彦は仰山な驚き方をして。

『はゝはゝゝゝ戯談を云つちや可けません。それは昔の事です、今はそんな下劣な苟くも紳士としての品性を傷つけるやうな、そんな下劣な事は斷じて見向かないです。貴女はそんな事を心配して居ると云ふのですか。それぢや私も貴女に誓はう。

『喬子さん、これから何處か靜かな所へ行つて、お互ひに將來の誓ひを取交しませう』

夏彦は起上つた、喬子の手をとつて。

（一四）

夏彦は喬子の手を取つて腰掛を離れた。後に隱れて居た御堀は猛然躍り出んとした。恰度此時、五六間離れた彼方に人の影。

『旦那。旦那』

と呼ぶ聲がする。夏彦は喬子の手を離して。

『オ、私は迂濶して居た。喬子さん、貴女は此處で暫時……。此處が寂しければあの池の邊の茶店でも可ろしい、あそこで待つて居て下さい。私人と約束した事があるから、一寸行つて逢つて來ます。直ですから』

『旦那。旦那ぢやアありませんか』

と黑い影は近づいた。

『探して居るやうです、一寸夜禮』

『早く來て下さいよ。妾淋しいわ』

甘へた調子の喬子の聲を後に、夏彦は周章てるやうにして去つた。呼んで居た黑い影と共に。

『早く來て下さいよ。妾茶店で待つてゝよ』

喬子は斯う云ひながら後姿を見送り、靜かに池の方へ歩み出した。

御堀も木蔭から出た。出るとスグ何の躊躇もなく歩みを早めて喬子の後を追うた。

我に近づく足音に喬子は振顧る顏を壓へつけるやうに、一人の巨漢はスグ後に立つて居た。

『喬子さんッ』

鋭い聲にギョッとして、電燈の光りに顔を見ると。

『オ、』

と云ひさま駈け出さうとした。思ひもかけぬ島御堀だったので、喬子の心は動轉した。

『喬子さん、逃げなくても可ろしい、まあお待ちなさい』

御堀は袂をしつかと掴んだ。

『貴女は私から逃げるよりも、何故あの恐ろしい色魔の手から逃げやうとは爲さらんのぢや。唐津夏彦の手から、免れやうとは爲られんのぢや』

喬子は强て落付いた風を裝うた。

『島さんでございましたか、ツイお見外れ申して失禮を……』

『はゝはゝゝ私を見違へられるのは當り然ぢや。貴女は龍岡をさへ忘れられたのぢやからな』

一句は劍の如く相手の胸を刺す。

『……龍岡さんの事でしたら一切……あの唐津さんに父が委任を致して居りますから……妾夫禮を』

と取られた袂を振離さうとする。

『お待ちなさい、可ろしい、龍岡の事が聞きたくないと云はるゝなら敢て云ふまい龍岡の事は云ふまいが、私は貴女の事を云はう、併し喬子さん、一年前の事ぢやつたね、私が貴女の家へ遊びに行つた頃、貴女は其頃は頻りに龍岡の事を聞きたがつて居たね。一年の時間は、大きな變化を貴女に與へたねね』

喬子は持前の負ぬ氣が、ムラ〳〵と込み上げる。侮辱を防ぐ態度を取つて。

『龍岡さんも大變なお變りやうですわね』

『龍岡の變つたのは貴むべき名譽の記念です。貴女の變つたのは忌はしい墮落ぢや貴女は落墮から救はれたくは無いかッ』

（一五）

墮落から救はれたく無いかと、詞も鋭く眼の光りも強く、我に逼る御堀を避けるやうにして、喬子は松の幹に半面を隠して立つた。

『私はあの唐津夏彦の如き、其名を口にするさへ不快な醜漢の云ふ事は、一切眞實と爲なかつた。イヤ貴女や貴女の御兩親の名譽の爲に、彼の云ふ詞を信ずる事は出來なかつたのだそれで假令何ういふ事情があらうとも、是非とも直接に貴女方に面會したいと思つて、今日までに何度足を運んだか知れない。それに貴女方は逢つて呉れない。私に逢はぬばかりぢや無い。龍岡の方に對しても、今日が日に至るまで更に何の挨拶も交渉も爲れん。いかに信義の無い、いかに不道德の行はれる今の世の中だつて、これ位ゐ亂暴な……これ位ゐ無法な事は有る譯のものぢや無い。無からうと私は思ふ』

『……そのお話なら』

と喬子は居堪らぬ風情、隙があつたら逃れやうと搆へる。

『お聞きなさいッ』

號令口調で叱りつけたが、憤怒を堪へる苦しさを双の拳に握りしめて、強て優しう穏かに。

『併し私はそれを責めるのぢや無い。責めるのぢやありません。貴女方が斯云ふ態度に出られたのに就ては、全く何者かの中傷……離間と云つたやうな事が行はれたのぢや無らうかと思つて居た。ところが今夜計らず此處で……私は貴女に逢ふ事が出來たが、それと同時に、貴女が恐ろしい墮落の淵に落ちかけて居るのを發見したのぢや』

『何が墮落です、失敬ぢやありませんか、そんな言語を』

『貴女は墮落ぢや無いと思ふのかね。私の詞を失敬と云ふのかね』

御堀は自分の視線を避けんとする喬子の顏を覗き込んで。

『喬子さん。私は日本帝國の軍人ですぞ。忠義と誠實といふ兩つの他は知らん。私が今度の事に就て、龍岡の爲に骨を折るのは、唯一片の友情からぢや。唯一筋の眞心からぢや。今貴女に對するも、又誠實以外に何も有たない。貴女は誠實を語る私の聲と、貴女を欺く唐津夏彦の聲とを聞較べる事は出來ないのか』

『妾そんな必要はありません。妾には妾の自由ありますから』

『自由？喬子さん、貴女は女子としての高等教育を受けた方ぢやが、あの女子大學では、人間の自由と云ふ事を、今の貴女の行爲と同やうな意味に教へるのですかね

イヤ貴女は今の其行爲を、自由だ恥ぢないと云ふのかね。それでは唐津の誘惑の爲ばかりぢやなく、貴女は貴女自身に墮落を逃げやうとして居られるのぢやね』

『妾そんな事に他人さんの干渉は受けません。斯んな所でお話をする事はお斷りを致します』

と喬子は心中の憤りに顔を眞赤にして立去るべく身を構へる。御堀は其前へ立塞がつた。

『今私から逃げたら、貴女は非常に後悔する時がありますぞ、取り返しのつかない深酷な悲慘な目に逼ふ事がありますぞ。今一度能くお考へなさい』

『そんな事貴方から聞く……』

『イヤ之は私ぢや無い。私が云ふのぢや無い。喬子さん。龍岡敬三の名に依つて、貴女に最後の忠告をするのぢや』

月の光りは松の梢から落ちた。御堀の濃い髯には霜か涙か……。

（一六）

嚴かな御堀の態度と、力の籠つた其詞は、犇々と相手を壓につける。喬子は逃れて走らうにも、身動きも出來ぬ恐怖を感じて、唯わな〳〵と震ひが起るのを、覺られまじと努めて居る。

今になつて龍岡に反く貴女は、唐津といふ惡魔の爲めに魅せられて居る龍岡の容

貌が醜くなつたために……相手の形體に變化があつたために、それが忽ち精神上思想上の作用たる戀愛に影響する……。ナル程そんな事も普通には有るでせう。淺果な戀……薄弱な愛であるなら。下等動物の情慾に等しいものであるなら。そんな事もあるでせうが、貴女は苟くも高等教育を受た方ぢや。龍岡に對する愛は決して形の上のものぢや無いでせう、彼の容貌が貴女の戀愛の基礎ぢやなからう、左樣云ふことは所謂娼婦の愛……、口に戀愛なぞと云つて其實は下等動物と同く、唯肉の滿足を求むる劣情に過ぎないのだ教育された貴女の理性は、そんな愚な、そんな暗いものぢや無いでせう私は嘗て龍岡に對つて、貴女の心を此樣に解釋して、煩悶に惱む彼を慰めて居たのじや、喬子さんが君に對する愛は、そんな輕薄な……形而下の卑しい慾望で成立つ戀じや無い。斷じてそんな事は無い、と云つて私は保証をしたのでぞ』

『……』

喬子は默つて顏を反けて居る。夏彦が來て助けて呉れるのを、心の中に祈つて居るのだらう。眼は斷わず彼方に注がれた。熱烈な御堀の苦言は其耳には入らぬのである。

『假りにです、相手の容貌が醜くなつながゐに戀の熱情が冷める。それに幾分の道理があるとしても、龍岡が彼のやうになつたのは、あれは何の爲にです、何が原因です、身軍人として實に名譽の負傷をした、彼の顏の醜いのは即ち彼の名譽の偉大を語るものですぞ、命を捨て敵彈の的に立つ、そこに軍人は何の報酬も求めはしませんが、貴女は夫たる龍岡に對つて感謝を捧げるのが當然じやないか、顏ばかりじや無い。手足の動かぬ廢兵となつたら、貴女はその手の代りとなり足の代りとなつて、國家のために殊勳を立てた名譽の夫を護るのが當然じや無いか。イヤそれが貴女の誇でなくちやならぬのだ』

御堀は前へ前へと詰寄る。喬子は、じり〳〵と後へ退く。

『貴女の戀が龍岡の人格を的としたのなら、今度の彼の負傷はイヨ〳〵貴女の心を

滿足させる筈じや。それに、それに何と云ふ事だ。殊に今夜のこの醜態は何だッ』

思はず烈しい聲を浴びせる、誰か近づく氣勢がした。

『私は此上は云はぬ、龍岡も此上は云ふまい。色魔のために手を取れて、墮落の淵に進んで行く貴女の身體は今ならばまだ止める事が出來る。今ならばまだ救ふ事が出來るのぢや』

『喬子さん』

と聲をかけて近づいたのは夏彦であつた。

『オッ島……』

驚く彼の頭上には、御堀の太い洋杖がビウと鳴つた。

（一七）

御堀が堪へ忍んだ憤怒は、夏彦の顔を見て一時に勃發した。喬子さんと聲をかけて近付く眞額を狙んで、自慢の腕力を太い洋杖に籠め、打下さうとする時夏彦はそれと見て『オッ島』と驚き周章て、後へ退さらうとしたが遲し。ビウと鳴る音の底に彼は地響打たせて轉んだ。續けさまに洋杖は鳴つた。花が飛ぶやうに帽子が落ちる。

『何、何を、何を』

と起上らうとしたが、針で刺された蠅のやうに、洋杖の下に手足を跪くのみであつた。

『汝のやうな奴に詞を代すのは無益じや。天に代つて俺が制裁を加へてやる』

又一聲、疊を叩くやうな音がする、夏彦は背中を反して、苦痛の唸り聲を立てた。

『痛いッ、痛い……君亂暴をするな、亂暴をしなくても』

『默れッ。默つて制裁を受けんか』

今度は確かに後頭を毆りつけた。ウンと云つて仰反つたので、御堀は一寸休むや

うに手を引いた。悶絶したのかと見て居ると、夏彦はそろ〳〵と這ひ出した。

『はッはゝゝゝ汝は、左様して這ふて居れ。這ふのが分相應じや。汝のやうな獣畜が人間並に起つて歩いたりするから、其ために正直な人々が欺かれる。コラ這ふて居れと云ふに』

漸と傍の柵に縋つて、身を起さうとするのに又振かぶつた。

『島君、ま、待ちたまへ、待つて呉れたまへ。云ふ事がある。云ふ事があるから』

『云ふ事がある？。汝に云ふ事があつても此方には聞く事は無い。耳の汚れじや』

『イヤ君。君は龍岡君の事で怒つて居られるのだらうが、それでは僕は實に遺憾です。僕は龍岡君や君のために』

と云ひつゝ起上つて見廻すと、喬子の姿はモウ四邊に見ねなかつたので、夏彦は稍安心の体。骨が碎けさうな痛を堪へて、此場を逃げる手段に、御堀の憤怒を和げることのみを考へた。

『僕は今龍岡君とあの眞島の令孃との結婚を纏めることに盡力をして居るのですよ

如彼して一たび結婚を拒んだ喬子さんの』

『汝が龍岡のために盡力をして居ると云ふのか』

『左様です。それを纏めたいばつかりに、僕は今專ら喬子さんを説いて居るのです それを君に誤解されては』

『其口を引裂いてやらう』

と御堀は腕を延ばして胸倉を引掴まうとする。夏彦は辛うじて身を交し、ドッと走つた。

（一八）

走つて逃げる夏彦の後姿を見て、御堀はモウ追はうともせず其處に突立つて居た。腹の中は憤怒に搔き拐らるるやうである。忌はしい喬子の墮落。憎むべき夏彦の所業。兩人を追掛けてくだける目に逢しても飽たらぬのであるが。それをする勇

氣を拔けて了ふのは、友なる敬三の失望の悲しみを思ひ遣る心の屈托からで。握り固めた拳を胸に當て、太い息をしながら、後の大樹に身を倚せる。

『唐津の御前樣は貴方で』

と云ふ聲に御堀は閉つてた目を拔くと我前に腰を屈めて立つ俥夫体の老爺が居た。

『へゝゝゝゝ御前樣でございますか。私ア銀次親分から參つたのでヘイ。あの之が先方からの御手紙の返事でそれから銀次親分が御前樣に申上げて呉れと云つて』

『何を』

と御堀は獨で喋舌る老爺の顏を眺めた。

『へゝへゝゝゝ。御前樣、妙な事があるものでございますよ、銀次親分の使ひで、今夜私があの魚藤つて奴の所へ、御前樣のお手紙を持つて參りますとね。驚きましたよ、あの魚藤つて野郎は私にも深い恨みのある奴でね、野郎私が仕事をしてる所へ飛込んで來やがつて、邪魔をした上に私を酷い目に逢はせた事のある野郎でね、

何時か返報をしてやらうと思つてる矢先に、御前樣のお賴で銀次親分が野郎を遣付けると云ふ仕事の仲間へ入つたのは、こんな有難い事はございませんよ、私は屹度野郎を』

『待て、待て』

と云ひながら御堀は差出された手紙を手に取つて見た、表には唐津樣と宛て魚藤と裏に記いてあつた、首を傾むける。

『野郎御前樣のお手紙を見るとニコニコしやがつてね、明日の晩十時に眞島樣の裏門まで伺ふからと云つて、その手紙を書いて渡したのでございますよ、銀次親分はその返事で、急に仲間を集めにかゝるから、其事も御前樣に申上げて呉れ、キツト大切な書付は此方へ卷上げてお渡しをしますから、御安神なさいますやうに申上げて呉れと』

御堀は頷いて手紙を開いて讀んだ。

『へゝゝゝゝ野郎私を見忘れて居たのが運の盡きでございますよ』

『明日の晩？、何處でやるな』

と手帽を納めながら問ふた。

『へイ、それが銀次親分の考へじやア途中で下手な事を遣つて、逃げられちや詰らないから、恰度眞島樣の裏通は淋しい所だから、彼處で待伏せして遣付けやうと云ふ寸法でございますよ。ヘッヘヽヽヽ御前樣、御安神なさいましよ。銀次親分と此屑久が居れば大丈夫、それにまだ二三人腕ッ節の强い、若い奴を連れて行くのでございますからね』

『左樣か、よろしく賴む』

と一言、御堀は袂から銀貨を一つ、身體を暗い木蔭に置いて、手を伸して屑久に與れる。

『ヘッヘヽヽヽお有難うございます。私は今、あの池の傍の茶店に御前樣が待つて居らつしやる、そこにお出がなければア此邊でお目にかゝる約束だつて、銀次親分が云ふものでございますからね。彼方に參つたのでございますよヘッヘヽヽヽ』

宵の中は暈きた月が見ねてあつたが、何時か闇になつて今にも降りさうな、冷たい風が颯がしく吹き出した。

眞島の邸に近い裏通の阪道を、足早に上つて來るのは魚屋の藤三郎であつた。

破れかぶれで自棄酒を煽つて、暴れ込んだ眞島邸で、相手になつた唐津夏彦が、芳枝母子の上に非常に同情し、自分の眞心を察して與れて。決して惡い樣には計らはぬから一切任して與れ、日を定めて浩造と改めて父子の名乘を爲せるやうに屹度盡力をするからと云つた、其約束の日の前夜に夏彦からの使ひが來て、萬事都合よく運び、芳枝母子の上に保護を加へやうと云ふ浩造の意中も確めたから、それに就て急に相談があるから、明晩十時頃に同邸の裏門まで來て與れ。其際は必ず父子の證據たる浩造自筆の書付を持參して與れと云ふ手紙である。藤三郎は雀躍りして喜

（一九）

んだ、花枝には其後の事は隱してある、モウ斷然と思ひ諦めた、今の自分達の境涯で、大富豪の眞島家の主人と、父子であると名乘つて出やうなぞとは、全く此方の不了簡である、情を知らぬ父に向つて、優しい母と同じやうな、親の慈愛を求めるのは此方の無理である、世に無いものと諦めさへすれば、と花枝は哀れな決心を語つた。

けれども一日々々と死に近づきながら娘の爲に浩造の名を、物狂はしく呼ぶ芳枝の慘しい狀を見、それを慰めつ賺しつ獨りで苦勞をして居る花枝の樣子を見ては、此儘にしては仲に入つた男の意地が立ぬ、夏彥からの返事に依つては、直接浩造に打突る手段をと、其事のみを考へて居た、そこへ喜ばしい信りであるから、氣の毒な母子の運が開ける時節が到來した、是でこそ神佛のお護りもあると云ふものと、獨りで喜び勇んで遣つて來た、今宵の話の都合でスグにも母子を引取らせやう、浩造を連れて突然に行つたら、瀕死の病人が飛び起つて、花枝は夢かと驚くだらうとモウ後の事まで愉快に想像して、時間が思ふやうに經たぬのにさへ焦れた。

九時三十分の時計を見て、約束の頃と眞島邸の裏門をさして來かゝつた藤三郎は急にパラ〳〵と降つて來た雨を避けやう軒も無いので、絆纏を頭から引被り、半丁向ふの煉瓦堀に、半間の小門が濡れて輝く、丸い電燈を的に走つた。

『ヤイ氣をつけあがれ奴盲目ッ』

横に顏を打つ雨に反いて、走る足元に不意の人聲がした。ハッと思つた藤三郎は足を止めようとする途端に、後から何者か。

『野郎ッ覺悟しろ』

叫ぶと共に打下したのは、肩の骨も碎くるかと、鐵か石かの兇器らしい、重い力で打据ゑた。

『何を爲やがるッ』

痛みを堪へて横へ交はし、闇と雨とを屹と透すと。屈强の荒當が三人四人。我を取卷き犇く姿。

（二〇）

我を取圍む敵は五人、逃すまじと犇くをの見て、偖は訝計に罹つたのかと、驚きながら身を構へる。血氣に逸るのを父の藤吉が苦にして、身體に彫つた刺墨の蹟を決して人に見せるなと戒めた、そんな事も場合に依れ、買はれた喧嘩に後は見せじと、袢纏を脱いで跣足になつた。颯と退つて塀を後に、サテ來い〻拳を固め、かゝる奴から毆り倒さん氣込は鋭い。

「遣つけろッ」

「遣つけ●ッ」

瀧のやうに落る雨、聲は亂れて前と左右へ、眞黒に打つてかゝるのを、近い一人の急所を蹴つけ、轉ぶを踏越ね當るを毆りつけた。

「生意氣なッ」

『疊んで了へッ』

三人ほどは棒のやうな獲物を有つた、二人は足をすくはうとする、藤三郎は鬪ひながら、迎ひの手紙を出したのは夏彦の計略で、大切の證據書類を我から奪はん爲のこの暴行ではあるまいかと思つた。

『人違ひを爲て後悔するなッ』

『何を吐しやがる、待つてたんだ』

『命が惜しけれア持つてる書付を』

一人が云ふのを叱ッと押へて。

『何も彼も身ぐるみ脱いで行きあがれ』

指揮をするのは銀次だつた。夏彦から頼まれて、証據書類を奪ひ取る爲に、手紙で藤三郎を誘き寄せ、仲間の無頼漢をかたらふて、宵から此處に待伏せて居たのである。

『フム頼まれあがつたな奴らア』

『エ、愚圖々々吐さず往生しろ』

『洒落た事を吐かしやあがるな。手前達が逃げやうたつて、此方で逃がさねゝ。賴んだ奴は知れてるんだ。一緒にして暗い所へ投り込んでやるから、左樣思へッ』

『それッ』

『何をッ』

激しい亂鬪は降りしきる雨の中で、泥濘をこねかへして暫時續けられた。藤三郎は滿身の勇氣を奮つて、阿修羅の如く闘つたのであるが、何分相手は五人である遂には手足の自由が利かぬやうに、地上に押へつけられた。

『早くしろ』

『懷中だ』

銀次は藤三郎の腹掛を探る、左はさせじと爭ふたが、芳枝母子の爲に大切な書付は、無念にも敵の手に渡つた。

『う、う、奴ッ』

身を藻掻いた其甲斐なく、盤石のやうに四人が乘ッかり、一人は書付を納める樣子。

『それをッ』

命を捨ても取返さねばならぬ品である死物狂ひの力で跳ね起き、躍りかゝるのを抱すくめる。

『親分先へ行きねゝ』

『賴むよ』

銀次が走り出す其前へ。

『惡漢待てッ』

雷鳴のやうな聲が轟き、スックと立つた巨漢がある。

（二一）

何處から來たとも知れず、不意に現はれた巨漢は、駈け出さうとする銀次の前に立塞がり、驚いて見上げる顏を拳を固めて毆りつける。ワッと云つて怯む所を、突倒して前へ進んだ、押へつけた四人の力が緩んだので、藤三郎は跳ね起る、書付を取返したい一念に、起上らうとする銀次へ飛びかゝつた。

魚藤と云ふのは其方か。加勢してやる。確かり遣れ』

巨漢は御堀であつた。

『有難うございます、此奴ア惡黨に賴まれやがつて』

『知つて居る。捕縛つて了へ』

聲ばかりでも人を押へつける威力がある、賴もしい加勢に藤三郎は身體の痛みを忘れて强くなつた。銀次が組敷かれたので、四人の味方が救ひにかゝる。それを遮つて御堀の洋杖は魔神の鞭の如く活動した。藤三郎は銀次の腹掛けから書付を奪ひ返した。四人は遂に這々の体で散つた。

『其奴を逃がすな』

と御堀は敵を組敷いて居る藤三郎に近づいた、銀次は一生懸命に爭ふたが、加勢の男を島御堀と知つて、彼の膽は縮み上つた。嘗て青島で龍岡に兇行を加へやうとした時、危く引捕へられんとした恐ろしい經驗がある。モウ書付よりも生命が大事だつた。

雨は上つて四邊の闇は少し薄くなつた藤三郎に腕を後へ廻され、御堀に胸倉を取られた銀次は、隙があつたら逃げやうと考へて居る。

『見たやうな奴だ』

と御堀は泥塗れの顏を覗き込む。藤三郎はまた御堀を見て。

『オ、貴方は何日か眞島で』

『フム左樣だつたな。お前が魚藤と云ふのか』

『ヘイ私でございますが貴方樣は』

『私は島と云ふ者じや。今夜此奴らが何か惡い事を企んでる事を知つたから、懲して遣らうと思つて出掛けて來たのじや。怪我は無かつたか』

『有難うございます。お蔭で大事な品物を取返して』

銀次は振放して逃げやうとする。御堀は掴んだ手にグッと力を入れる。息が詰まるので手足を操搔いた。

『コラ銀次とか云ふのは汝だらう。乃公と唐津夏彦とを間違へた、頓間な使ひの爲に汝達の仕事は破れたのじや。汝は唐津夏彦に頼まれたのだらうが』

銀次は默つて俯向いた。

『汝は何うも見たことのあを奴じや明るい所で檢めて遣らう。來い。此方へ來い』

眞島邸の裏門の電燈の明るい所へ引摺るやうにして連れて行く、藤三郎は後からおした。

（二二）

顏を見られまじと爭ふたが、前後の力に泥濘の中をジル〳〵と引摺れて、銀次は

電燈の下へ連れて行かれた。御堀は片手で頤をグッと突き下げて、泥に汚れた凶者の面を凝と眺めた。

『何處かで見た事のある奴じやが思ひ出されん。お前は知らんのかね』

藤三郎も穴の明くほど凝視つたが。

『見た事の無い奴ですが、私を待伏せたのは、頼まれて遣つた仕事に違ひございません。旦那はあの唐津といふ人を御存じのやうでございますが、私はあの人に交渉事があつて、今夜は其用事で此處へ參つたのでございますが』

『唐津からの手紙でだらう。其手紙の返事は私の手に入つたのじや。奴め樣々の惡事を働いて居ると見ゐる。コラ汝は斯うなつてもまだ卑怯に隱し立をするか。何も彼も白狀して了へ。唐津夏彦から頼まれたと云ふ事は判つて居る。頼まれた事を殘らず云へ、云はんな痛い目に逢はせるぞ小突き廻して壁へ押へつける、銀次は目を白黑させたが、それでも口は開けなかつた。

『旦那、私が此の眞島の家に關係した大切な書付を持つて居るので、それを卷上げ

やうと云ふ魂膽でございますよ、野郎甘く欺しあがつて』

と藤三郎は憤怒の眼で邸の方を睨みつけた、

『私も眞島の家と交渉を有つとるのじやが、計らずお前に逢つたのは奇がや、あの唐津夏彦の爲には私も欺かれた一人じや』

斯う云つて再び銀次に對つた。

『汝に第一問ふ事がある、汝はこの乃分の顏を知つとるだらう。何かの時に何處かで見た事がある。汝其覺ねがあるだらう。それを云つて見い』

『イエ、……始めて』

と銀次は始めて物を云つた。

『ウム其聲にも覺ねがある。嘘を吐くと許さんぞ』

『イエ全く存じません、ヘイ全く』

『知らんと云ふか。よし、、それなら乃公が思ひ出してやる。オイお前此男を縛つて吳れ』

ヘイと藤三郎が立かゝる。

『旦那、全く一時の不了簡から飛んだ心得違ひを致しやした。ツイ仲間の奴に賴まれて、惡い事と知りながら』

『まだそんな嘘を吐くか。汝は唐津から賴まれた、銀次と云ふ今夜の兇行の主魁者といふことは判つとる。汝はその夏彦と何ういふ關係の奴じや』

『そんな方は皆目知りません。唯仲間の奴から』

『默れッ』

と一喝、顏も碎けよと鐵拳を見舞つて。

『普通では白狀すまい、モ一度締め上げて遣らうか』

御堀は劇しく襟を引掴み、咽喉を締めやうとして、明るい方へ引寄せると。

『オ、汝は青島で龍岡を』

と叫んだ。銀次は堪らず死力を出して遁れやうとする。藤三郎が引据ゑやうとする時。ズドンと一發、耳元に不意の銃聲。御堀の帽子が前へ飛んだ。ハッと身を屈

める隙に、銀次は捉へられた手を振離して……。

（二三）

『あれお母さん、氣を鎭めて下さい。誰も居やしませんから、そんなに動いては可けません』

花枝は起上る母の後から抱き止めた。

芳枝はモウ食も喉へ通らぬ危篤の身体で居ながら、二三日前からは精神に異狀を來し、花枝と雇婆の他には誰も居ない家の中に、恨めしい人々の幻しの影をつくつては、それを怒り罵つて狂ふのであつた。

花枝は哀愁の極みを通り越して、唯夢心地で介抱に從ふて居た、母の精神が狂ふたのは、全く自分の爲である、殘して死ぬる我子の上に、過度に心經を勞らせた結果である。一たび浩造に逢ひ、娘の將來を賴んだ上で無ければ、決して死なぬと云

ひ張つた。けれども病に虐まるゝ肉體は其强い心に伴はぬ醫師が匕を投げてから半月といふ日を經たこの頃、肉體はいよ〳〵衰弱し精神はいよ〳〵强く昂ぶる、それがために遂に物狂はしくもなつたのである、我がために人の世の終りを、安らかに爲得ない母の心の有難き、底知れぬ慈愛の深さを思ふては、泣くより外は無いのである。

『イエ其處に、あれ彼處……に彼處に隱れて居るぢや無いか。隱れてお前を嘲うて居るのです、畜生……卑怯者……眞島浩造の鬼奴畜生め……エエまた其處に一抱止めるのを離さうとする、母の强い力が此病軀のどこから出るかと、花枝は恐ろしいやうに思つた。

『お母さん、誰もそんな人は居ませんから、氣を鎭めて下さいよ。ね、判つたでせう、妾判つて』

枯木の聳ゆる形で立つた、芳枝は急に蒲團の上に倒れた、花枝の肩を確かりと捉まへて。

『お前は花枝です、お前は妾の子の花枝です。ねゝ左様だらう』
『お母さん左様よ、妾誰の子でもありません。お母さんの子です、お母さんひとりの子です』
『あゝ左様だとも。妾ひとりの……妾ひとりの子だわねね』
抱いて抱かれて泣くことの、悲しい中の慈愛の味もこれが限りになるのかと。
『お母さん、妾お母さんひとりの子と云ふこと、お母さんには解つて？、妾お母さんひとりで可いのよ、モウ誰も……お父さんなぞ妾には要らないのよ。萬一か妾ひとりになるやうな事があつても、お母さん見て居て下さいよ。妾はひとりで立派にお母様の位牌を護つて、この水野の家の名に疵をつけるやうな事は爲ませんから。そればかりは安心して下さい……お母様に敵はつた藝で、妾獨立して行くだけの覺ねはありますから。其方がお母様だつて、今まで立貫いたお母様の意地だつて立つだらうと快ひます。あんなお父……眞島と云ふやうな、あんな非道な人に父と云つて縋るのは、反つて妾達の恥辱と云ふものです、妾はモウ此決心を極めたのですか

ら、お母様も其氣になつて……妾の事は安心して下さい。そして妾が屹度此恨みを……お母様や妾の今の此口惜しい思ひを晴らす事の出來た時、お母様も喜んで下さい、お母様、これが妾のお頼みです、ね、解つて、妾の云ふこと お母様には解つて？』

（二四）

眞島邸へ足を運んだことなぞ、一切病人には聞かせてないのであるが、父の無情は告げぬ譯には行かなかつた。迚も親子の名乘なぞ及びもつかぬ事であるから、そんな冷酷な、人情を解せぬ父を親と慕ふて何時迄も付纏ふのは、却て此方の恥辱である。夫よりも、自分は孤獨になつても、腕に覺ねの三筋の糸で、細くとも清い生活を營てる。そこに母が二十年を立貫ぬいた强い尊い意地も立つといふもの。さうして待つ時節には、怨んを呑んで死ぬる母の靈を慰める事も出來やう、自分の口惜

い……踏躙られたやうな酷い恥辱も晴す秋があるだらう、斯う覺悟を決めた上は夢にも呼んだ父親の名も、モウ決して懷しいものでは無い、況て其大きな富や榮華な地位がナニ羨ましからう。それあるが爲に父の心は腐つて居る。富を護るがために貧の母子を顧みぬのである、高い地位を憚つて、隱した罪惡から逃げやうとするのである、結局父の富や地位は、父を恐ろしい罪人と爲るのである。罪人も罪人……父の爲に母は狂ひ死をするのでは無いか、何諦めてもこれが壽命とは思はれぬ。長い女世帶の苦勞に命を削られたとするならば、それは無情にも父が欺いて捨たのが原因である、重い病氣の上に氣まで狂ふたのも、悉く父の非道がなす業である、母を殺すのは父である、廣い世界の苦勞の海へ、僅た母子を投込んで置いて、今また櫓とも櫂とも力にする、母の命を奪はんとする鬼とも惡魔とも譬方ない父の所業。懷かしいと思つた父の名を、それからは母の仇敵と呼びかへて、死んで行く人の怨恨を晴すのが、子たる自分の務めであらう……。

花枝の決心は石の如く堅い、悲哀と絶望の底に落ちて、年齒よりも倍の倍人の世

の憂苦勞を味はうた怜悧な處女が血の涙を呑んで我心に誓つた覺悟は、いかなる力も之を碎く事は出來まいと思はれた、

精神の狂ふ芳枝にも我子の聲は通じた骨ばかりの手で確と握つて、

「……妾はお前への義務を果さないで……死んで了ふのが辛いのです……その爲に死にともないのです……けれどもモウ命が……命が保ちません……妾はモウ死ぬるからね、お前の決心は妾嬉しい……妾にとつては何んなに嬉しいか……けれど妾はお前にそれを爲せまいと思つて……妾が歩いて來た道を歩かせまいと思つて……苦しい意地を立てさせまいと思つて……、色々に思つた事も皆水の泡になりました、花枝堪忍してお呉れ……悉皆妾の過失でした」

「お母樣モウそれを云はないで、そんな事は悉皆忘れて了つて、心を樂に持つて居て下さい、妾これから何んな苦勞があつたつて、それは何うも有りませんけれど、お母樣が死ぬるまで妾の事で……妾の事で臨終まで苦勞をかけたと思ふと……」

云ひたい事も云ひ殘したいことも、母子の緣の盡きぬほど、餘る悲嘆を斷ち切つ

て、死の魔の斧は酷たらしう、其夜の曉方に芳枝は遂に歸らぬ人となつた。

（二五）

『お春、オイお春は居ないのかい』

と臺所の次の室で、蒲團の上に寢轉んで居た藤三郎は、目を覺して女房を呼んだ

彼は四日前の雨の晩、外で手を挫いたと云つて歸つた後、醫者にかゝつて治療を受けて居る、二週間は休まねばと云ひ渡され、厚い繃帶で手を釣つて、不自由な身体を横たへて居るのであるが、腕の痛みよりも胸中の苦惱の方が遙かに辛い、眞島邸へ暴れ込み、憎い夏彦を思ふ存分の目に遇はさねばと逸るので、島御堀が制めて諭した。

血氣に任せては理も非に落る、自分にも考へがあるからと云つて、猶憐れな芳枝母子の上に何とかして力を貸さうとさへ約した、それを切めてもの事にして決惱

腹を押へて歸る途中、大勢を相手に鬪ふた時、棒のやうな物で叩かれたと思つた、其れが急に痛み出して、其夜は遂に一睡もされなかつた、父の藤吉は此頃はズッと龍岡の方へ行き限りで、宅には妻のお春と夫婦のみである。

『チョッ居ないのい』

と焦れて隔ての襖を引明ける、井戸傍で洗濯物の音がする、火針の所へ出て坐ると、所在無さゝうにそこらを見廻して居たが、急に手を伸して戸棚の隅にある酒の瓶を取り出した、右手が利かぬので、持つたコップが落ちて音がする。

『あら此人はまあ何を爲るのだよ』

と女房のお春が周章て上つて來た、ぬれた手で酒瓶を引奪る。

『晝日中鼠が出て暴れるのかと思つたら、まあ大きな鼠！、何を爲るのだよお前さん』

『そんな客な事を爲るなよ。一ぱい呑まして呉んな』

『可けませんそんなこと』

と難かしい顔をして眺んだが、呆れてツイ可笑しうもなる。

『怪我をして唸つてる病人がお酒でもあるまいぢや無いか。此人は呆れ返つ了うよ』

『唸るかい、べらぼう奴』

と藤三郎はコツブを突出して。

『これ位の怪我に唸るやうな藤さんじやア無ねから安神しな。可いから一ぱい注いで呉れッてことよ』

『ほゝほ唸るつてぢや無いかね、昨夜だつて碌に寢や爲ないぢやないか』

『それは手が痛い爲ぢや無ねやな、他に唸る事があるんだ。何でも可いから一ぱい』

『可い事は無いよ。他に何がそんなに心配事があるの。それを聞かせてお呉れ』

『聞かしたつて益に立たねね。俺の商賣だい、若ね奴が魚の數ほど群てる河岸だ。些とやそつとの喧嘩位有らうぢや無ねか。それを一々嫌に御注進に及ぶ奴があるもの

のかッ』

罵るやうに云つて酒を求める、夫の顔を凝と見て。

『それは左樣だともね。斯んな稼業だから、河岸である喧嘩なら、それは商賣の上だから仕方が無いけれど……妾には然うは思はれないもの。これは妾の邪推かも知れないけれど、お前さん何處か他所で喧嘩を爲て來たのぢや無いの』

『煩ねなア。他所で脱いだか羽織の皺は』

と鼻歌でコロリと横になる。コツブは猶離さないで。

『そんな事を云はねねで、後生だから半分注いで呉んな。父さんが宅で見ねね、毎晩飲む酒じやア無ねか』

『妾お酒を惜しんで云ふのぢや無いわ。そのお父さんが不在の間に、斯んな事があつては、妾申譯が無いから』

お春の目には涙が湧んだ。

（二六）

夫思ひのお春の胸には、此中から安からぬ思ひが一つの鬱屈となつて蟠まつて居る、疑惑の雲は日一日と濃く擴がつて、生來快濶に出來た優しい女性の心を威した花散る頃から若葉にかけて、今が盛漁季の、稼業の最も忙がしい時である、郭公に名乘かけ、初鰹の荷姿勇ましく、五月の末の勘定には、一年中の儲けを占めるとしたもの、その大事な時に夫の心が商賣から離れて、河岸の買出しにも手脫りが多く見て居て齒痒いことも多い、それを注意すると叱り飛ばされる、優しい親切な夫だつたのに、直に肝癪を起して荒つぽい詞も聞かされる、それを變だと思へば彼の事も此の事も、疑へば際限が無く覺ゐ初めた苦勞にツイ涙ぐまるる事も多い。

晝の仕事の疲れを、一銚の醉ひに忘れて、戲談口に家中が笑ひに滿ち、夢も面白かつた昨日までに引かへて、何やら知らず物事に氣を焦々させ、難かしい顔をし

て歸つて來ては、飯も役目のやうに濟ませると、フイと何處かへ出掛けて行き、夜遲くなつて歸る事も珍らしくないやうになつた、萬一や他所に咲く仇し花に……。

『お父さんに心配をかける樣な事が出來ては、妾申譯がないから、隱さないで眞實の事を云つて下さいよ、斯んな怪我をするやうな喧嘩を何處で仕たのです、何ういふ事情から……』

『それを聞かなくたつて可いてことよ、それよりか』

と突然に酒瓶を引奪り、させじと爭ふのを身體で防いで、續けさまに口から傾むける、辛うじて手からもぎ取り。

『まあ』

• •

と云つて呆れながら、亂れた着物を掻き合はせる、色白の若い女房が、今の驅ぎに力ばんで、赤くした顏は美しかつた。

『止せよ、つまられたのか喰つかれたのら、恪氣喧嘩にもならうけれど、腕を折りかけたのぢや色消しで愛想が盡きらアな、ア・久し振だから臟腑に浸み渡らア、恫

じ事なら一寸燗をしてよ、何かあつさりと小皿で可いから、膳拵へをして臭れる親切がありさうなものだなア』

『お前さん眞實に、お酒は怪我に毒ぢや無いの』

爭ふ氣でもツイ折れて、疑ふたのは此方の惡いのかと、夫婦の情の底から湧く。美しい心に樂られる。

『何の毒なことがあるものか。骨の違つたのには酒が藥よ。見や、此繃帶の匂ひを嗅いで見や。酒精の氣がプン〳〵するから。醫者が左樣云つたつけ、藥だと思つて精出して飲むが可いつて』

『ほゝそんな事があものかね』

子供に物を强請られるやうに、否とは云つたがツイ一銚子、輕く浸けて膳に置く。

『お肴は何もありませんよ、魚藤つて云ふ人此頃些とも廻らないから』

『此奴ア好かつた』

と上機嫌。

『全くお得意先には濟まねねなア』

『それも左樣だし、お父ちんや妾がこんなに心配するから…』

『解つてるよ、俺は斯うして寢て居る氣はしねねのだ。可愛さうな人達を助けなくちや……』

と云つたが氣を變へて。

『お春、手前も一ぱい飲みねね』

（二七）

醉ふた夫を臥床に寢させて置いて、お春は仕かけの洗濯にと土間に下りかけた時。

『御免なさい、此邊に魚藤さんと云ふのは』

と表から老人らしい女の聲。

『魚藤は手前ですが何誰樣』

と應へても。

『エ、魚屋さんで魚藤と云つたら分るさうで』

と耳が遠いのか又繰返す。

『手前が魚藤でございますが』

格子戸を明けると、六十近い屋婆と見ゐる姿、腰を撫すつて内を覗く。

『御存じではございませんかな』

『ほゝほ魚藤は手前でございますよ、何方から』

得意先の使ひと見てとつて、お春は愛嬌よく會釋をして。

『あの何か御用でございますか』

『あゝ左樣でございましたか、ヤレ〳〵大分探し歩いて、此の通り汗をビショリかきました、御免なさい』

と日傘を疊んで入る。

『モウ日中はお暑い位でございますね。御苦勞樣でございます、一寸二三日休んで居りますので、皆樣の御間を缺いで、まことに濟まない事でございます、あの何方樣で』

老婆はニコ〳〵笑つて。

『休んで？、左樣か。矢張妾の推量通でしたね。大方そんな事であらうと思ひました。それで無けねば、あんなに親切にして來て下さつた魚藤さんが』

『あの貴女は何方からお越しでございます』

『イヽエ、それには』

と手を振つて。

『その事は花枝さんから呉々云つて呉れと云ふてね、色々お世話をかけた上に御商賣の』

お春は眉をひそめた。

「御商賣やお宅のお邪魔をしては濟まないから」

「花枝さんと仰有るのは何誰でございますか」

とお春の聲は稍激しかつた。始めて相手の詞が其儘耳に入つたので、老婆は頷いて。

「ほゝほゝゝ貴女は魚藤さんのお神さんで。ではまだ花枝さんを御存じないのですね。妾としたことが自分の方の事ばかり喋舌つて、御免なさいましよ」

何が何やらお春には碧目事情が解らぬ。けれども花枝々々と女の名を云はれる度に、妙に心が騒ぐのである、夫が親切にして、度々その花枝と云ふ女の許を訪ねると云ふ意味だけは推量される、それから色々と世話をかけて居るから、お宅の邪魔をしては濟まない？、夫が花枝といふ女をいろ〳〵に世話をして居る……世話をするといふのは何云ふ意味か、普通に解釋しても、男が女を世話すると云ふのは。

「妾はその花枝さんの家へ、ツイ此頃雇はれたのでございますから、詳しい事は能く知りませんが、本統に花枝さんもお袋も此方の御親切を喜んでね、お若いのにあ

んな方は珍らしいと云つて」

「一寸お待ちなさつて、一体その花枝さんと云ふ方は、何處の何をする方で」

「ほゝほゝゝそれは別嬪さんで、あの邊でも人が噂する位でございます」

（二八）

耳の遠いお金婆さんは、聞くよりも自分に喋舌る方が樂と見ねて、頻に話を續けた。花枝といふ娘は界隈に取沙汰さるゝ美人であること。その美人の上に孝行が又評判で、金の草鞋を穿きかへたつて、迚も他で探し出すことは難かしいといふことなぞを並べ立てた。そしてお仕舞に斯う云ふことまでつけ加へた。

「それに又珍らしい堅造でね。男と云ふものは一切交際をしない。唯お宅のばかりでございますよ。それと云ふのが此方の御親切に絆されてね。今お話したやうな氣の毒な生計なもんだから、他人さんの御親切は殊別嬉しいのでございますわね」

お春はモウ何も問はなかつた。默つてお喋舌をさせて置いて、大暑に夫と花枝といふ女との關係が知れたのである。それに此老婆は自分を花枝を世話する人の妻と知つて居て、一向無頓着に憚り氣もなく秘密であるべき事を打明ける。世間には家内に公然の妾沙汰がある。大方そんな事に誤解をして居るらしい、夫が此頃の擧動に不審を立て居た自分の想像は、果して的中したのである。我に隱して秘密の女を有つ夫の心の淺ましさ……それを知らずに居た今までの自分の愚かさ。胸は早鐘をつくやうで、覺られまじと努めたが身休はわな〳〵と震へた。

不完全のお金婆さんはモウ喋舌る事が無くなつたかと思はるゝ頃。急に改まつた形をして更に語り出した。ショボショボした目を一際忙がしう動かして。

『妾大事なお使ひを後にしましたよ齡が寄ると頓と埒こちが無いやうになつて。あの之は直接にお目にかゝつて話して呉れと云ふ事でございましたが』

『イエ妾が聞いて置きませう』

とお春は次の室の夫の樣子を伺つた、微な鼾聲が聞ゐる。

『宅は今不在ですからね』

と耳を口に寄せて云つた。

『お不在でございますか。それではお歸りになつたらお話を爲さつて下さいませ、妾その用事で來たのでございますから』

一段聲を潛めて。

『實は何でございますよ、その病氣のお袋が夜前とうど亡くなられたのでございます。その事に就て、急に御相談がしたいので、一寸でも來て戴けたらと、斯う花枝さんからのお賴みでそれで上つた樣な次第でございます』

『まあ左樣ですか、それはお氣の毒ですねね、可ございます、宅が歸りましたら其事を云つて、直に伺はせる事にしましやう』

とおは春は矢張耳に口を當て云つた、其顏色は青かつた』

喋舌り疲びれたやうな顏をしてお金が出て行つた、それに隨いてお春も門口まで出ると、

『あの花枝さんのお宅は何方やらでしたね』

『それは能く御存じでございますよ』

『イエ、それでも念の爲に妾聞いて置きたいのですから』

花枝の家番地まで詳しく聞いたお春は唇を噛んで凝と老婆の後姿を見送つて佇つて居た。

（二九）

夢現を辨へぬ悲哀の中にも、時刻は人間と交渉なく、一切を過去に葬らうとしてズシ〳〵進む。花枝のために昨夜からの世界は眞暗闇であつた。暗い穴の底へ唯ひとり坐つて居ると、交る交るに悲しい人の聲が聞ゐる。それは路次内の人達が弔詞を云ひに來て呉れるのである。それに一々挨拶はしたが、誰が誰やら判然とはせぬ懵とした頭腦には、自分さへも意識されなかつた。目を閉ぶるとスグ生きた母が見ゐる、目を開けるとスグ死んだ母が見ゐる、生と死との中心に、自分は生死を超ゐた冷たい土の塊のやうに思はれた。

僧が來て枕經が始まる。何彼と世話をして呉れるのは、同じ踏次内の、會社員の妻君と、新聞社へ出て居る人の老母で、壁隣の巡査の妻のお安は、あの高歩貸の一件以來、感情を害して餘り寄附かぬやうになつて居る、今度も僅の義理に一寸悼詞に顔を出したばかりで。

お安は何か用足しに路次口へ出た、そこへ來かゝつた婦人がある、何か探してゝするのが、足を止めて四邊を見廻したが、お安の傍へ來て小腰を眺めると。

『あの一寸物をお尋ねしますが、この邊に水野つて云ふ家を御存じではございますまいか、確か此邊の路次のやうに』

『あゝ有りますよ、水野芳枝つて家でせう』

『イエ花枝とか』

『左樣です、芳枝つてのは母親で、其の人は昨夜死ましたよ』

「それでございます、昨夜不幸があつたとか申すことで」

「それは此路次を突當つて左の家ですよ」

「何も有難うございました」

と婦人は歩みかけたが又立止る、お安が後を振向くのと顔を合はせて、極り惡げに會釋をすると、

「あのそれから」

と何やら云ひ掛けたが躊躇ふ樣子である。お安は愛嬌笑ひをして。

「あの何かまだ」

「はい……あの繼かんことをお尋ねしますが、その家の花枝さんと仰有る娘の方は」

と云ひかけるのを引取つて、お安は早合點に。

「あゝ貴女は花梭さんの事を？、御緣談か何かの事ですね、左樣でございますか。そんなら妾水野さんとはッイ壁隣ですから。花枝さんとも至つて心易くして居るの

ですから」

「まあ左樣でございますか、それでは貴女にお伺ひしたら」

婦人は好い人に逢つたのを喜ぶ樣子。

「お邪魔をして濟みません」

と近づいた。

（三〇）

洋傘を疊んでお安の傍に寄つた婦人は四邊を憚るやうに聲を潛めて。

「その花枝さんと云ふ娘さんは何か商賣でも……何う云ふ事をして居る方でございませうか」

「花枝さんですか」

とお安は好い喋舌相手が出來たので、躁やぎ出した。

『商賣と云つては格別……針仕事なぞを爲たりして居るのですが、尤も前には、これは近所へも内證ですがね、妾だけ位でせう此事を知つてるのは。妙な商賣をして居たこともありますよ』

『左樣でございますか。何な事を？』

『ほゝゝほそれがそれ、一寸變り商賣であの三味線を彈いて門を流して歩いたり爲たことがあるのですよ』

『まあ』

と婦人は嘲ふやうな目付をした。

『それがね、お袋が病氣で、生活に困るからと云ふのでしたからね、妾達もツイ隣家の事ですし、まあ可愛想だ、と思ふものですから、止せば可いのにお世話に、いろ〳〵相談相手にもなつたりしたのですよ、死ぬる病人に藥も當がはれないと云ふのでせう、金を借りたり判を捺したりして、それは出來るだけの事をして上げた積ですけれどね』

『まあ能くねね』

『それに貴女聞いて下さいよ、その妾に此頃では碌に物も云はないのですもの、恩を仇つて眞實に此事だらうと思つて、妾腹が立つて仕樣が無いのですけれど、亭主は警察の方へ勤めて居ますし、あんな詰まらない、云はゞ下り商賣の者を相手に、眞面目になるのは此方が馬鹿だつて云ふものですからね、それも左樣だともつて歸めて居るやうな事で、眞實に今時の娘は恐ろしい樣ですわね』

『左樣でございますか、そんな人ですか花枝さんと云ふのは』

『何でも亡くなつたお袋と云ふのが以前は何處かで藝妓か女郎かだつたらしいのでね、父親も知れない娘が、その花枝つて云ふのですよ、爭はれないもので、矢張血を引くのですわね、思も義理も知らないところが、お袋そつくりですよ』

お安は豫ての遺恨を晴らすは此時といつたやうに、口を極めて花枝の事を惡しざまに罵つた、それでも猶ほ飽き足らぬか。

『此頃では妾は全く恐ろしくなつて、寄付ぬやうにして居ますが、亭主が左樣申す

のですよ、あんな女を此路次に置いては、自分の職務に對しても濟まないから、何とか說諭をして、それで肯かなければ警察の方で處分をすると云つてね」

「あの何か。

「それが貴女、大きな聲では云へませんね、ほゝほゝゝゝ、今お話した門藝人よりもモ一つ妙な商賣が始まつたのですよ、男を誘き入れてね」

「男を？」

と婦人は熱心に聞いた。

「それも貴女、此邊を廻る魚屋で、一寸小意氣な勇肌の男がありましてね、其れを女の方から口說落して、此頃では公開に、夫婦氣取で居るのですよ、虫も殺さない顏をして、大きな男を手玉に取るのですから、恐ろしいつたらありません、全で淫賣婦のやうだつて、亭主は職務が職務なもんですから大層怒つて居るのですよ」

聞いて居た婦人の顏は赤くなり又青くなつた。

それから間もなく、花枝の家を訪ふた客、それは此婦人であつた。

（三一）

母の野邊送りは今日夕方に出す事になつた、通夜をして呉れた人々は一先引取つて、僧も歸つて去つた、何處と云つて知らす親戚も無い、正當なら眞島家と此際に交渉があるべきであるが、それはモウ此方から斷然諦めて了つた。假令あの財產の全部を香典に包んで、父が這ひづくばつて出て來ても、母の靈前には通すまい決心がある。母は意地の辛いことを云つて、自分にはそれを立てさせまいとした。けれども父の酷い仕打は自分を突放して、母と同じ道を歩ませねば置ぬのである。

妾乾度お母樣の怨みを曝します、これ見たかに眞島一家の人に酬つて見せます、

とは芳枝の臨終に花枝が誓つた詞である。それは何の答も無い冷たい屍骸に對つても、冥福を祈る稱名の聲にと共に繰反された。香を手向けて呉れる人が、自分を除けては悉く他人の寂しい味氣ない有樣にも、父に對する怨恨の念は、烈々として燃

ゐ上る。佛の前で修羅を抱いてはと、思ふまいとしても左樣行ぬことばかりである他に御親類はありませんかと、事情を知らぬ人達が尋ねる度に、皆な遠い所に住つて居るものですからと、ツイ近い駿河臺に、何百萬の富を誇る人が、今日の葬式の喪主であらねばならぬ事を隱して嘘を云ふ情なさ……。

お母樣と呼んだら返詞でもありさうに思はれて、棺の前を去るには忍びぬ。

人の居ぬ間を泣きたい程泣かうとするのか、花枝は身動きもせずに坐つて居ると雇婆のお金が臺所から急遽と來て、今朝便に行つた魚藤から、お神さんが來ましたよと云ふ。藤七郎は四五日姿を見せなかつた。何彼と母の生前に普通ならぬ世話を受け、眞島との掛合にも他人で出來ぬ骨を折つて呉れた其人には一番に知らさねばと思つて、使を出したのであるが、まだ逢ふた事の無い其人の妻女さんが來たとの事に花枝は嬉しさに飛起つた、屹度夫婦で來て呉れたのだらう、まあ何といふ親切かと。時が時だし人の心が泌々嬉しく、涙を拭いて迎へに出た。

初對面の挨拶を濟ませると、花枝は藤三郎から受けた親切を厚く感謝した。

『これ迄にお禮に出なければ濟まないのでございますが、大病人を控へまして、妾ひとりなもんですから、ツイ濟まない事ながら失禮を致して居りました』

お春は座敷へ上つてから、まだ一言も物を云はぬ、相手の詞に會釋をして居るばかりであつた、それに何の氣も注かず、花枝は心からなる感謝を伸べた。

『こんな穢い所でそれに邊鄙でございますのに、態々お越し下さいまして』

『イヱ妾勝手に來たのですから』

其物云ひに圭角が立ち、憤怒を含むやうにも聞ゐる、オヤと思つて花枝は其人の顏を見ると、正しく怒りの色凄く、キと嚙んだ唇に、穩かならぬ感情の動搖が迸しる。合點行かぬのを。

『あの萬望彼方へ、此處は何でございますから』

『イヱ妾そんな悠長な隙は有ちません、魚屋渡世の女房ですからねほゝほゝゝ』

（三二）

樣子が變だと氣が注いて、不審ながらに、奥の座敷へ案内しやうとすると、魚屋渡世の女房にそんな悠長な隙は有ちませんと、一句は鋭く相手の膽を突刺すやうな恐ろしい詞を云つてお春は屹と向き直つた。花枝は押へつけらるゝやうな氣がして呆れて其顔を凝視るのみであつた。

『亭主が大變お前さんのお世話になるんですつてね、妾改めてお禮を申します』

『イエ妾の方こそ……』

『まあ默つて妾の云ふ事をお聞きなさい』

花枝は此の人は氣が變では無いかと思つた。

『亭主が世話になるのか、お前さんが世話して貰つてるのか知らないが何方にしてもお前さんは隨分好い氣の人ねゝ。呆れ反つて物が云へませんよ、あの藤三郎と云ふ男にはね、妾と云ふ女房がありますよ、妾と云ふものが隨いて居るのですよ、それにお前さん何だね、まだ年齢も行かない小娘の癖に、人の亭主を引摺り込んで』

『あれお神さん、一寸お待ちなすつて、それは貴女何か』

『エ、お默りと云つたら、今日は妾が物を云ひに來たのです、お前さんから一言も聞くことは有りません』

とお春は屠にかゝつて、花枝に口を開けさせなかつた。

『妾は何も彼もチヤンと知つて來て居るのですよ。お前さんも人の亭主を横取りしやうと云ふ度胸があるなら、今更になつて辯解がましいことをお云ひでないよ』

花枝は目も心もクラ〳〵と、天地が顚覆るかと、譬やうの無い驚愕に打たれて、唯茫然として居る。

『ほゝほ、そんな空惚けた顔をして、お前さんと云ふ人は恐ろしい人ね。あの藤三郎は其日稼ぎの魚屋渡世だよ。妾ばかりぢや無い、老ひ年寄つた親のある身分だよ重い荷物のある稼人ですよ』

疊を叩いて詰寄つた、お春の顏は嫉妬に暗くなつて居る。

『それがお前さんと云ふ人に引かゝつてから、全で商賣も何も手には付かないで、毎日々々宅を外に』

『そ、それは貴女間違ひです。間違ひでございます。妾そんな決してそんな覺ゑはございません。それは何かの』

『盜人猛々しいつてお前さんの事だよ。手の掌に丸めこんだ男なら、そんな事で思ふやうにもなるだらうがね、そんなことで妾を欺さうとしたつて駄目だよ』

花枝は口惜し涙をハラ〳〵と零した。

『ほゝばゝゝ、その涙で妾の宅の屋根が漏りかけてるんだぞ。それに散々絞り取つた上でまだ飽き足らないで、死人を出汁に使ふなんて、眞實にお前さんは凄い腕を有つてるのねね』

母の事まで引合に出し、生皮剝くる耻辱を浴びせられ、花枝は堪まらず袖を覆ふて泣き伏した。

『泣きたいのは此方だぞ。さ、モウ斯して妾が來た以上は、今日限り奇麗に亭主と手を切つてお呉れ。此後途で逢つても、物も云はないと云ふ返詞をしてお呉れ。今までの事は盤臺の魚を野良犬にでも浚はれたと思つて、妾諦めて上げやうから』

『貴女ッ』

と花枕は血を絞る聲で。

『御深切に甘へたのが妾の過失でございました。受けました御恩に對しまして、妾貴女には何も申上げますまい、何時か自然に判る時がございませうから……モウ再び……決してお目にはかゝりません』

お春は猶散々に辱しめ、今度男を誘つたら、普通の所置では置かぬと云ふ事を、泣き崩れた花枝の耳元で喚き散らして去つた。

× × × × × × × × ×

此事があつてから三日の後である。島御堀を案内して、藤三郎が此路次へ入つて

來た。

（三三）

藤三郎は腕の痛みが漸く除れたので、氣にかゝつて居る花枝の家を訪ふべく、それには約束のある島中尉と同行せんものと、先つ其寓居に赴いた。

御堀は彼の夜計らず助けた藤三郎から、花枝母子の事を聞いて非常に同情し、且は藤三郎が一片の義俠心から母子の上に盡力をする事が、自分が龍岡敬三の爲に働いて居るのと、恰度同じやうな位置であつて、共に人道を辨へぬ眞島浩造や、奸智に長けた唐津夏彦の爲に、苦しめられて居るのであるから、相互に力となつて正義の爲弱者の爲に鬪はうと云ふことを語つた、藤三郎は雀躍して喜んだ、自分の父が龍岡家へ出入するのも不思議の緣であるから『今後は龍岡樣の爲にも働きます』と云つて、頼もしい味方を得たのを喜び勇んだ。

今日の途中も互に胸襟を開いて語つた、御堀は常から一種の懷しみを有て憧憬して居た、氣に生きる江戸ッ子と云ふものゝ、磨ぎ澄した白刃のやうな氣前を有つ藤三郎を、十年の友に對するよりも濃かい心をもつて愛した。

『旦那、此露次でございますよ』

『左樣か、突然私が行つたら何かと思つて驚くだらうな』

『何と云つて喜ぶか知れませんよ、死にかゝつてる病人と、若い娘の二人限だのに誰ひとり訪ねてやる者は無ゐのでございますからね、當り前なら眞島の邸から、馬車をもつて迎へに來なけれアならねゐので』

『左樣だ、浩造が自身に出て來て所置をしなければならん。不都合な奴ぢや』

『併し旦那が來て下すつたら、母子の爲には、彼な鬼見てゐな薄情な野郎が出て來るよりか、何ぼう嬉しいか知れませんせ、花枝つて云ふ娘の方は、モウ父親の事は斷然諦めたと云つてね』

『私はそれを實に悲慘に思ふのぢや。諦めると云ふ裏には、定めて血も涙もあらう

と思ふ』

『旦那、一寸お待なすつて』

藤三郎は斯云つて、路次の突當りを曲りかけ、スグ其處の格子戸の、花枝の家の前へ走つて行つた、彼は何かを見つけて驚いたのである。

『此家かね』

と云つて御堀も近づく。

『此家は空家だね』

『……』

藤三郎は目をパチ〳〵させて、魅まれたやうな顔をして、堅く下された格子戸の錠前に觸つて見、又隙間から覗き込んだりした、人なき家は音もなく、斜に貼られた貸家札が唯白々と……。

『何したのだ。此家ぢや無いのかね水野つて云ふ家は』

『へイ、イエ此處なんで』

『でも此家は誰も居ない空家ぢやないか、札が貼つてあるぢやないか』

『へイ……札が貼つてあります』

『此處に違ひないのかね、間違つちせんか』

『イエ、違ふ氣遣ひはございません』

『では轉宅をしたのだらう』

『イエ、そんな筈はございません、動かす事の出來ねね病人を抱へて居るんでございますから』

『でも空家ぢやないか』

『へイ……』

藤三郎は自分の身體をつゝめつて見たい氣がした。

（三三）

その門に來るまで思ひも掛ぬ、花枝の家が空虛となつて居るので、藤三郎は呆れ惑ひ暫時は茫然として居た。

『隣家で聞いて見たら何だ』

と御堀が云ふのを。

『イエ其家は可けねゝで』

『巡査の家は花枝の敵である。

『旦那、こんな譯は無ねのだが、私が一寸聞いて來ますから、路次口で待つて下さい』

と云捨てゝ駈出した。

路次を出て五丁程行つたところに、此邊では大きい酒屋がある。そこが路次内の家主である。藤三郎は突然店へ飛込むと。

『御免よ、あすこの路次に居た水野つて云ふ家は』

と云切らぬ中に、奥の方から鎌の音をガヂャ……させて、主人が出て來る。

『家ですかい、エ、あの後が明いて居ますよ、水野さんの後が』

と借家人かと早合點したらしい。

『イエ借りるんぢや無ねんで、あの水野さんは何したんです、明家になつてますが何處かへ』

『あゝ水野さんの事をお尋ねかね。水野さんなら轉宅しましたよ』

『エッ轉宅を！そ、夫は何時の事で』

『昨夜の事ですよ』

『昨夜！變な事だなア』

と藤三郎は合點が行ぬ。獨り呟いて。

『そして何處へ？。あの病人を連れてゞすかい、お袋が難かしい病人だつたのに、あれを連れてゞすかい』

『あ、お前さんまだ病人が死んだ事を知らんのですかい』

『エッ病人が？』

『こうつと、あれが四日前の晩でしたよ、葬式を出したのが、本統にあの母子ほど可愛相な者も少ないだらう、お前さん知合でもありなさるのかね』

『お袋は死んだのですか』

と藤三郎は落膽して、苦しさうな太息をついた。

『病人が死ぬると間もなく、葬式が濟むか濟まないに、家を明けると云つてね、私の處も長い間居て貰つて、母子共氣質も能く知つて居るし、それに他に親類縁者も無い樣子だから、何う云ふ目的があるのか知らぬけれど、さうバタ〳〵と周章て出るにも及ぶまい、殊には若い女の身で、拙手に彷徨くと取り返しのつかぬ事になるから、まあ急かずに考へたら何ぢや、と斯云つて止めたけれど、何と云つても聞かないで、昨夜暮方到頭出て行つてしまひましたよ』

『何處へです、何處へ行つたんです』

と急き込んで問ふた。

『さあそれが私には判りませんのぢや』

『判らない？判らないつて、何處へ轉宅したか、それが判らないつてこと無いでせう』

『無い筈のが判りませんのぢや、それがね、何處へ行きなさると尋ねても、何うしても云はないで行つて了つたので』

『フム　』

『道具類は皆な賣つ了つてね。そして近所隣へ香典返しの配り物までして、奇麗に後を片づけて置いて、プイと行つて了つたので、實に豪い娘だが、何處へ行つたのだらうつて、此邊りでも評判をして居るので』

『御免』

と藤三郎は表へ飛び出した。家主の老人は肝を潰して、手に持つ鍵を取り落とす。

（三五）

一寸聞いて來ると云つて藤三郎が駈出したので、空家の前にひとり取殘された御堀は、所在なさに表の通りへ出やうとした、其時隣家の入口が明いて、顏を出したのはお安であつた、御堀は此家で尋ねやうとした時、藤三郎がそれを制めた、それが何の譯だか解らなかつたので、今近所の人の顏を見ると、之に聞きさへすれば、と思つて立止まつた。

『一寸お尋ねするが、此家に住んで居た水野といふ宅は何處かへ轉宅をしたのかね』

お安は空家の番は自分だと云ふ顏をして、前掛で手を拭き〳〵喋舌り出した。

『水野さんですか。ほゝほゝゝ、水野さんは貴方夜逃げをしましたよ』

『夜逃げを？』

『隣近所に住む妾達にも知らさないで、昨夜の間に何處かへ去つて了つたのです。それが爲に近所では大迷惑をして居る者がございます、手前の方なぞも』

『病人があつたさうぢやが、それは何うしたのですな』

『病人ですか、病人が死んで三日經つか經たぬのですのに、家を明けて了つて、皆が呆れて居るのでございますよ』

『母親は死んだですか』

と御堀は首を傾むけた。お安は土間から出て來て。

『葬式を出すと云つても、皆で世話をして色々と何したのに、其禮を一言云はないで、夜の間に逃げて了ふなんて、あんな人も無いものだつて。それが貴方まだ十九か二十の娘さんでせう、恐ろしいやうだつて』

『それが花枝と云ふ娘ですか』

『左樣でございますす、名前は優しいのですけれど、あんな娘は見た事が無いつて欺された人達が、寄つて集つて大評定をして居る最中でございます』

『花枝と云ふのはそんな娘ではありますまい。至つて親孝行な』

『ほゝほゝゝ誰も初めはそれで欺されたのでございます、何の親孝行なことがあるものですか、親が死ぬるか死なぬのに、内證の情夫と手を取つて、駈落をする娘ですもの』

『男と？。そんな、情夫と云ふやうなものがあつたのかね』

『有つた段ぢやございませんよ、其も貴方此邊を得意場にして歩く魚屋の』

と云ひかけた時、家主の所から戻つて來た藤三郎の姿が、路次口へ見ねた。

お安はそれと知ると泡を喰つて家の中へ。格子戸をピシャリと閉めたので、御堀はいよ〳〵變な路次だと想つた。

『旦那、判りました。判りました』

と走つたので息を喘ませて云つた。

『判つたかね。俺は今此家の人に聞いて居たところぢやが』

『此家ですかい。こゝの奴が何を云ふか知れたもんぢやアございません。旦那には

まだ云はなかつたが、此家の内の妻女さんでさ、高利貸の狒々野郎と腹を合せて、花枝つて娘を食ひ物にしやうしたのは。花枝さんが轉宅したのも、大方此奴の爲ぢや無ねかと思ひますよ』

『フム左樣か。それで解つた。口を極めて罵つて居たが、それが爲めであつたが』

『惡口を云つてましたかい。畜生ッ、一度は腹癒をしてやらうと思つてたところだ旦那、一寸待つてお呉んなさい』

藤三郎は腕をまくつてお安の家へ暴れ込まうとする。御堀は之を制めて。

『そんな奴は打擲つて置け。それよりも判つたと云つて、何處へ轉宅したのぢや』

『旦那、判つたと云つてもそれは判らねねのので。昨夜家を疊んで何處かへ去つ了つたと云ふのです。道具類を賣拂つて、近所へ香奠返しまで奇麗に濟ませて、何處とも知らさないで去つ了つたと云ふのです。大方此家の奴らが又何ぞ、惡い事を企みやがつて、その爲ぢやア無ねかと思ひます。それで無けれア、お袋が死んだと云ふに、私に知らさねねと云ふ筈はございませんからね』

『左樣か。近所へ迷惑をかけた上に、男と夜逃をしたと云ふのは嘘だな』

『コッ、そんな事を吐したのでございますか。女郎ッ』

格子戸を蹴破りもしかねまじき勢ひで飛込まうとするのを確と抱止める。

（三六）

お安の家へ暴れ込んだところで、それが何の役にも立つまい、それよりも行衛の知れぬ花枝の事に就て相談をしやうと、御堀は藤三郎を慰めて共に路次を出た。

兩人は默つて、夕方の寂しい町を歩いた。藤三郎は若い女の姿を見ると、停止つて眺めた。何とも云へぬ悲哀が胸一ぱいになる。人顏も朧になつた頃、とある河岸の材木置場の前へ出た。御堀は四邊を見て其處に腰を下すと。

『此處で相談を爲やう、お前は一体何う思ふのぢや』

『ヘイ』

と云つたが頓には詞が出ぬ。

『それ程にお前の世話に爲つた者が、何もお前に知らさないで、突然に轉宅をする姿を隱して了うと云ふのは實に訝しい、之には何か事情があるらしう思はれる』

『ねゝ、有るに違ひございません、第一お袋が死んだ時に、私の所へ知らさないと云のからが、何うも合點がまゐりませんよ』

『何か左樣云ふやうな事情……そんな事になりさうであつた、と云ふやうな事情でも無かつたかね』

『ございません、そんな事は指頭ばかしもございませんでした。そんな秘密を有つやうな母子ぢやございません、只モウ透き通つたやうな……何と云つて可うございますか、自然に斯う美しい眞心が人を押へつけるとでも云つたやうな、それは立派な人達でございました』

『フム』

『私は斯うなると、死んだお袋にも花枝つて娘にも、實に氣の毒でね、お袋の息の

ある中に、眞島と父子の名乘を爲せやうと云つて、私が固く約束をしたもんだから定めて死ぬる眞際まで、私の行くのを待つて居たことでございませう、諦めたと云つても若い身空で孤獨になるんでございますもの、萬一やと思つて心待に、花枝さんも私を待つたに違ひございません……それを思ふと私は實に……」

藤三郎は涙を呑んで語つた。

『秘密らしい事は無かつたと云ふのだね。男と手を取つて駈落したと云ふやうな事を先刻の女が云つたが、無論中傷だらうな』

『だから私はあの女郎の舌を拔いてやりたかつたので、そんな事がある樣なら私が何の旦那を引張つて來るものでございますかよ。人の爲に働くと云ふやうな、そんな力のある私ぢやございませんけれど、フトした事から母子の難儀を知つて、若い娘の家へ出入りするんだから、世間体のあるのも構はねねで、助けて遣りたさが一ばいに、骨を折つたと云ふものは、可愛想な母子の、美しい精神に感心したからでございまさあ、そんな事は決してございません、嘘でございます、嘘でございます』

『私も無論左樣信じて居るが』

と結んで居た手を解くと、身体を屈めて蹲んだ藤三郎に近く。

『攻めかけた城は拔かなければ置ぬのが私ら軍人の意地ぢや。弱い者を助ける江戸ッ子にも其氣象はあると思ふ。水野花枝と云ふ憐れな女を探し出して、初めに心に誓つた事を果す精神はお前にあるだらうな』

『旦那、意地は私らの命でございまさ。軍人の旦那にだつて負けは爲ませんよ』

『ウム、左樣して呉れ。私は人道の爲に鬪ふのに、お前のやうな强い味方を得たことを喜ぶのぢや、一緒に探し出す事に努めやう。

（三七）

藤浪にほふ池の邊、竹にそよく薰風も夏めく。今湯から上つた喬子は、化粧室を

出ると新緑に滿ち庭園を逍遙して飛石傳ひに池の畔に來た。花の架から洩れ射す日光は、雨の如くに美しい人を照し輝いた。

紫ひたす水は動いて、緋鯉眞鯉の群が浮く。喬子は石燈籠の後に咲く山吹の花を拐つて投げた、餌かと欺されて鱗を光らし、渦になつて躍るのを面白いものに凝視つて佇つた、それも暫時で、庭下駄の音を態と厲しう、パッと藻草を亂して散るのを、ほゝほと獨りで笑つて歩み出す。

二三歩で又立止ると、藤花の魂のやうな瑠璃鳥が、靜かな庭をすとつ飛んだ。その行く方を見るやうに、懶い姿勢で花架の支柱に倚りかゝる。

喬子はモウ以前の喬子では無かつた。彼は唐津夏彦との間に秘密を有つ身となつた。兩親に隱して夏彦と屢密會をした。けれども子の愛に盲目同樣の浩造を始め母の元子も之を知らなかつた。それが邸内の召使ひや其他の人人からは、知つて知らぬ振をして居るのかと思はれる程、家庭の紀律は愛娘の爲に弛められてあつた。

喬子は今愛する夏彦の事を想ふて居る其想ひには樂しい希望が纏ふて居る。

『緑色は希望だわ』

と彼は獨語にち。そして四邊を見廻した。青葉若葉の梢からは、生々した氣が蒸し出されるやう。爽やかな風が渡ると、新樹は浪の如く、其影は水のやうに顫ふて其度に身も染まるやうな緑色は滿庭に漂ふた。喬子の眼にはそれが悉く自分の希望を包む和かい光が嬉しかつた。

喬子の希望は、軈て男爵夫人と爲るのである。軍人の龍岡敬三に注いだ戀は今は男爵家の後繼者たるべき夏彦に向けられた。敬三との戀は遂げぬ中に破れた。夏彦との戀は結婚の式を擧げぬ前に遂げられた。それを喬子は當然の成行として、聰明な自分の理智が指揮をして呉れた、最も賢い行爲であると信じて居る。

『喬子其處に居たのかい。先程から探して居るのぢや』

父浩造の姿が橋の上に現はれた。

「何有？、お父樣」

「一寸話がある。座敷へお出」

『此處で可いわ。お父樣此處へ入つしやいよ』

『イヤそんな所で出來る話ぢや無いよ。來てお呉れ』

『お父樣つて本統に殺風景な人ね。妾今此處で考へてる事があつてよ。默想に耽つて居るのよ』

浩造は子に引かるゝやうに橋を此方へ渡つた。

『默想でも空想でもそれは俺に解つてるのぢや。若樣の事じやらうがはゝゝゝ』

『ほゝほゝんな事を』

『あんな事があるものか。臙の花も池の鯉も、皆な若樣の顏に見ゐる癖に』

『まあ、お父樣は霧骨ねね。だつて新緑は希望の色だつて云ふわ。妾希望を』

『これ又そんな難かしい事を云ふて俺を困らせやうとする。喞筒でも水道でも可いわ、急に話さんならん事がある、矢張若樣の事ぢやが』

夏彦の事と聞いて、喬子は父と連立つて座敷へ入つた。

（三八）

西洋館の、二階は喬子の居間になつて居て、其下は應接の室に出來て居る。

喬子が學校を出た時に、成績の優れた褒美として、莫大の金をかけて、新に建築した建物で、浩造が喬子を愛する程度も推量らるゝ、善美を盡した普請である。

『此室で可い、此處で話を爲やう』

と浩造は應接室の椅子に腰を下した。

『唐津さんのことつて何んな事？』

と喬子は甘へた調子で其傍へ來る。

『まあ掛けなさい。左樣立話で出來るやうな事ぢや無い。今日はお前の意志を充分聞かなければならぬ』

父が存外眞面目なので、浮々するのを强て制へるやうな風。

「意志つて決つてるぢやありませんか。其んな事改まつて聞かなくつたつて、お父様知つて居て態と聞くんだわ、酷いわねね、妾困らせやうと思つて」

「コレそんな戯談ぢや無い、お父さんは眞面目に聞いて居るのぢや、喬子、お前あの若様と結婚を望むに就ては、充分に考へての上ぢやらうな」

喬子は顔も赭らめないで。

「そんな事お父様は何改まつて聞くの。意志の發表は左様輕卒なものぢや無いわ妾充分熟考した上の事よ、妾そんな事今更になつて聞かれると、何だか侮辱されてるやうな氣がするわ、お父様は餘りよ」

怨じるやうな娘の詞に、甘い本性を現はして、浩造は周章る。

「左様ぢや無い、左様云ふ譯ぢやない、これも畢竟お前可愛さぢやが」

と乘出して。

「若様じやの、あの方とお前結婚したいと云ふ、其考への中には、あの若様が唐津爵家の相續人である、男爵になる人である、と云ふ事も、之は無論お前の希望の

的の一つであらうがの」

「それは知れ切つた事だわ、妾男爵夫人になつ見たいわ、妾屹度爲つて見せるわ、それ妾ばかりの幸福ぢや無いもの、ね左様でせう、お父様だつて、妾が唐津家へ入つたら何んなに幸福だか知れないわ」

「それは解つてるよ、それなればこそ俺は骨を折つて居るのじやが、ところが何うもそれが誠に困るテ」

と浩造は頭へ手をやつた。

「困るつて何う様るの？、ねお父様、何に困つて」

「何と云ふて眼目の事じやが、若様を男爵家へ入れるのが却々困難じや、容易な事じや無いテ」

「まあお父様ばあんな事を、それはお父様が引受けて居て下さるのじや無いの」

喬子は疊かけて云つた、詰るやうな眼付で。

「引受けたならこそお父さんは、一生懸命に其事にかゝつて居る、又今となつては

お前の爲じやからな、賴まれんでも若樣に男爵家へ歸つて貰はんければ爲らぬ、ところが先方が何うして一筋や二筋で行くのじや無いヲ、商賣の方なら六十年來、困つたと云ふ詞は嘗て口にした事の無い俺じやが、今度の此件はかしには實に閉口させられたよ、それと云ふのが斯う云ふ事になつて居るのじや』

左も當惑の顏をして仔細を語るべく聲を潜めた。

（三九）

夏彦の父たる男爵唐津昌弘は、今貴族院で勢力のある木曜會の幹事、政界に一種の重きを爲して居る事に於て、同族間に羽振を延ばし、財産も地方に山林だの鑛山だのと不動産が多く有つて、其富を羨まれて居る。唯だ世嗣の一人息子が放蕩の夏彦である事を除けては、足らはぬ事も無い御華族樣で尊敬されて居る。

『ところが事象は表面では判らんものぢや』

と浩造は話の半ばで一寸太息を漏らして。

『俺も直話を聞いて驚いたのぢやが、喬子、唐津さんはあれで今火の車ぢやさうだよ』

『火の車つて？』

『それ程苦しいさうぢや。地方にある不動産も三分の一は抵當に入いつて居ると云ふ有樣で、尤も之は極めて秘密だから、決して世間へ漏らして與れるな、と斯云はれる、俺も實に驚いたよ』

『お金を借りて居る？』

『無論左樣ぢや。それが何でかと云ふに、悉皆政治の方に關係して、あの木曜會なあれの方で確かに金が消ゐるさうぢやテ』

『其の代り貴族院で、押も押されもしない勢力があるわね』

『其の代り財産に餘が入つては何もならん』

『お父樣つて其方ばかり云ふから嫌になるわ。それはあれ程の名譽を買ふ代價じや

ありませんか。それ位の事は當然だわ。妾夏彦さんのお父様に同情するわ』

『馬鹿を云ふては困る。そんな考へで居るから親の心子知らずと云ふのぢや、そんならお前に問ふが、お前は嫁に行く唐津の家が貧乏でも構はんと云ふのか』

喬子は眉を寄せて、

嫌な事よ。誰が』

『それ見い。何程華族でも、食ふや食はずで襤褸をさげてはお前だつて嫌だらうが俺にしてもそんな所へ遣りたくは無い』

『お父様つて、そんな消極な例を引かなくつたつて可いわ。いくら何だつて生活に因る様な事があるもんですか』

『まあそれは比喩じやが、内輪の缺點を知つて居て、考へんと云ふ譯にも行かんからな』

『そんな事云つて、お父様は妾男爵夫人にするのが嫌？』

『イヤそれは俺も望むからこそ』

『ではお父様其氣になつて盡力して下さつたら可いわ。何でも無い事よ』

『何でも無い事があるものか。若様を邸へ入れる代りに俺に金錢上の力を貸して呉れと云はれるのじやが』

『さうだわ。お父様が左様して下さつたら可いわ。それが當然だわ』

『遣り切れん』

と浩造は椅子に頭を靠せ、それでも怒つたでもなく微笑を湛へて。

『そんな事を云ふが、今日迄に若様に出した金でも少額じや無いぜ、又千圓とかの金が要ると云つて、先刻手紙が來て居たよ』

『それは必要な金ですよ。邸へお歸りになればその準備が要るわ。早く出して上げて下さいよ』

『左様向ふ方の加勢ばかりしては困るな。些とは俺の事も』

喬子は劇しう首を振つて。

『嫌よ〳〵。モウそんな事云つて居られないのよ。お父様つて些とも察して下さら

ないから』

泣き出しさうな氣色なので、浩造は又急に優しうなる。

『これ何も左樣怒らんかて、相談じやないか。お前の將來の利益を思ふからな相談じや無いか』

『モウ相談の時機じやありません。妻モウ……』

『何も若樣の家へ行くと決心したかて、そこは物の利害を能く考へて、今なら何うにでもなる事じや。現に龍岡かて左樣じやないか』

『聞きません。聞きません』

と喬子は耳に蓋をした。

『モウ何うにもなりません。お父樣が反對なら妾獨りで勝手に嫁きます』

『はゝはゝゝ左樣駄々を捏ねては困るな、何うもならんと云ふて、それは何故じやな』

『知りません』

『お前何か若樣とモウ約束したのか』

『知りません』

『出來たのか』

『モウ』

と云つて彼方を向いた娘の顏を、偖はと讀んで。

『モウそんな秘密が成立つて居たのか』

『呆れる父の顏を今度は喬子が覗き込んで。

『秘密つて、お父樣だつて秘密があるわ。それ、何日かの女乞丐。あれ屹度お父樣の子よ。ね、左樣だわ、ほほほゝゝゝまアあの顏？』

（四〇）

喬子は父の秘密を能く知つて居た、此前花枝に會つた時から、父が他所の女に生

ませた子であると云ふ事は、能く覺つて居たのである、父がその秘密を葬るべく、夏彦に賴んで色々に手を盡して居ることまでも知つて居る。けれども今迄に其事を口には出さなかつた、格別自分に利害を感ぜぬ事柄だし、世間にはそんな事例は幾らも有るだらう位に、モウ花枝の事なぞ思ひ出さなかつた。それよりも自分には夏彦との戀が可なりに忙がしい、夏彦が男爵家へ歸る日は、自分が男爵夫人となる時である、其事は父の奔走に依つて近々に實現され、脅かされて居るやうな、龍岡、島の人々の手から免れ得るのも今直である、とそればかりに嬉しい思ひを馳て居たのだつた、それなればこそ既に夏彦と人には漏らさぬ秘密を有つ仲とはなつた、それに今となつて此結婚を考へ物だと云ふ父の詞は。假令道理があつても自分は承知が出來ぬ、男爵家の財政に不安心の事があれば、可愛い我娘の爲に、父が何とか救濟の策を講ずれば可いのである、それが親としての當然の義務ではないか、と斯う疊かけて逼つた上、遂に漏らした夏彦との秘密に、父は驚き呆れた樣子を見て、負て居ぬ氣で花枝の事を云つた、すると忽ち浩造は悄氣る、その樣子が可笑しいと云

つて、全で他人の上を嘲るやうな態度で。

『それ御覽なさい、お父樣だつてあんな秘密があるんだもの、妾だつて有るわ』

『これそんな事を云ふなよ……お前は左樣思ふのか』

と頗る曖昧になる。

『ほゝほ、まだあんな事を云つて、お父樣妾を瞞着しやうたつて駄目よ、妾本人の口から聞いて居るんだもの、駄目よ〳〵』

『これ大きな聲をするなよ、聞ゐるじや無いか』

『お母樣に？ほゝほ妾お母樣に云はうか知ら』

『馬鹿ッ』

浩造は手で打つ眞似をして。

『そんな事をしたら承知せんぞ』

『そんならお父樣だつて、妾の秘密を尊重して下さつたら可いわ』

『何うするのじや』

『早く結婚が出來る樣にして下さいな』

『遣り切れん』

と浩造は再び頭を後へ傾げる。

『左樣して下さらなかつたら、妾お父樣の秘密を悉皆お母樣に告げるから』

『これ親を雪隱詰めに爲る奴があるか。困つた奴じやはゝはゝゝゝ』

怒る事もならずに、反對に苦しい念を押され、詮術が無い、何とか途をつけやう

と云つて、浩造は去つた。

それから暫時經つて、夏彥が訪ねて來た。喬子の居間へ入ると、自宅へ歸つたやうな擧動で、暑いと云つて洋服の上衣を脫ぎ拾て。香氣の高い草花の鉢を弄つて居る喬子の傍へ、妻に對する夫の如き態度で、

『喬子さん。何を爲て居るの』

と云ひつゝ近づいた。

四一

夏彥の白い額には汗が見ゐる。それを拭きながら此方に近づくのを、喬子は媚のある眼で迎へたが、窓から流れ入る青葉に濾された爽やかな空氣の裡に自分の心も身体も盪けて了ふやうな、男々した强烈な氣が矢庭に周圍から迫るのを覺ゐて、そこに快い賴もしさを感じた。

『入らつしやい。待つて居たわ』

『好い匂ひですね。溫室物ですか。フム麝香撫子と同じ匂ひだ』

と石竹色した美しい花の鉢と、花よりも艶な喬子の顏とを七分三分に眺める。

『ほゝほ厭よ』

『だつて美しいから仕方がない。お父さんの丹誠ですか溫室は』

『イヱ父はあの通り忙がしいのに、それに花なぞの趣味は零です。あれは唯金を儲

ける事ばかり、ほゝほゝゝ』

『それで結構。お互の趣味慾を滿足させるには、其金の力が無くちや可けませんからね。金と云へば彼伴は可いでせうか。先刻も手紙を持たして頼んで置いたですが貴女も應援して下さつたでせうね』

『そんな事問はなくつても可いぢやありませんか。何時だつて妾から喧しく云つて出させてるぢやありませんか』

『はゝはゝゝゝ之は恐縮』

と夏彦は態と頭を下げて。

『喬子さん、貴女怒つたですか』

『そんな事無いわ。……怒りはしないけれど』

『怒らないけれど腹を立てたのですか』

『ほゝほゝゝゝ。まあ掛けて頂戴、妾貴郎に相談があるわ。貴郎は本統に氣樂だわね』

『私氣樂？戯談ぢや無い。私の何處が氣樂に見ゑるです』

男が怒つたやうな顔をして、眞面目に椅子にかけるのを見て。今度は喬子の方から。

『貴郎怒つて？』

『全く怒りたい位です。今の私を氣樂や暢氣と見られては耐らない。私は貴女との結婚を成就させる事に向つて。今全力を傾むけて居るのですよ。一日も早く邸へ歸りたい。さうして一日も早く公然の披露を爲たい、とそればかりに奔走して居るのです。今度お父さんから出して戴く千圓だつて、悉く邸へ歸るに就ての準備に要する金ですよ』

『それは知つて居てよ。だから妾そんな事段ぢや無いわ。父の財産を悉皆無くしても、貴郎がお邸へ歸れるやうにして下さいつて、今も散々云つたところですわ』

『それは感謝します。その事を私が永遠に忘れないと云ふことが、お互が夫婦となつた將來の幸福の基なんでせう。それ位私の爲に骨を折つて下さるのに、氣樂や暢

氣と云つて攻撃されるのは酷い、私は四五日來宿に寢た事は無い位ですよ』

『何處に寢て？』

『友人の所です。重立た友人だけは此方の應援者にして置きたいですからね。皆同族ですがね。父が萬一私の歸る事を拒めば、其時は斯う云ふ友人がそれ〳〵に飛出して後援をして呉れる事になつて居るのです。今の金も此方に費ひたいのですよ』

『そんな事になつて居て？』

『着々夫婦の軍は進んで居るのです。御安神なさい』

『それだと可いけれど』

と嬉しさうな顔をする。

『氣樂は取消しますかね』

『ほゝほゝゝゝ取消してよ』

『はゝはゝゝゝ私は大いに慰めて貰ひたい積りで遣つて來るのですからね』

『慰めるわ。今日は花を見せませうね、こんな物詰らないから』

いそ〳〵と起つて行きかけるのを。

『イヤ此花のカーチションの香りが可いですよ。路易九世でしたかね、十字軍を率ゐて阿弗利加に出掛けた時、野生のカーチションを採つて兵士に與へた。すると傷病兵が美しい花の香にり昂奮せられて悉く勇氣を起したと云ふ故事があります。私も此花の香に醉ふて貴女の爲に大いに勇氣ある兵士となりませう』

『まあ兵士だつてほゝほゝゝゝ』

『私は兵士だ。私は貴女の幸福を計る爲めには、兵士を以て任じて居るです。戀の兵士さはゝはゝゝゝ』

（四二）

夏彦が斯の道で鍛ねた腕は、喬子に對して恰も小兒を弄ぶ力士のやうである。戀の兵士であると云つた詞が、喬子の胸に波を打たせる。

『カーチションも好いけれど、妾これ好きよ。これは妾の机の上で咲いてよ。可愛いでせう』

と云つて窓の所に置かれた白薔薇の鉢植から、大輪の一枝を惜し氣もなく折つて來る。

『これ挿して上ませうね』

色變りの縞の下衣へ、花を挿さんとする其手を握つて。

『薔薇ですか。ウム此花も好いです。戀と希望の象とて、花咲き初めし時にこそ、薔薇の色は麗しき……スコットでしたかね此花を歌つたのは』

『西洋には此花の詩や歌が多いわねね』

『それが悉く戀ですね』

兩人の身體は、一つの椅子に支へられた。喬子のかけた後から夏彦は兒れて覗き込む。

『又此花には面白い意味を有たせてあるです。紅白の花は暖かい……戀を意味するものとしてあります。それから』

と少女の笑みのやうな花瓣を、喬子の手と共に引寄せて。

『これの莟は秘密で、開いたのは秘密の曝露としたものです。この花は開いて居ますね』

『ほゝほゝゝゝモウ秘密には出來ないわ。お父樣知つて了つてよ』

『お父さんが？。覺られたのですか』

と驚くやうに云つたが、顏には笑を浮べて居る。

『それでお父さんは何と云ひました。怒つたですか』

『怒つたつて仕方が無いわ。一層貴郎の事を早く落着するやうに、盡力をして貰ふやうに頼んで置いてよ』

『感謝します。却々貴女は豪くなつた』

『まあ、あんな事を。貴郎が大膽にさせたのだわ』

『左樣でも無いでせう。初戀の研究はあの龍岡で卒業されたのだから』

『あら』

と手に持つ花で打つ眞似をする。それを支へやうとして。

『痛ッ。刺が有りますね』

『あら堪忍して頂戴。負傷をして！』

『負傷は結構。モウ少し酷い傷を負けて欲しいね』

と小指の先を舌で吸ふ。

『過失だつたわ。繃帶持つて來ませうか』

『要りません。折角の負傷をそんなことをしては惜いです』

『そんな事云はないで、堪忍して下さいよ。痛むの。痛くつて？』

『イヤ眞實此刺す樣な痛みが、貴女から受たのだと思ふと、非常に愉快です。喬子さん。私は貴女の爲に或は既にマゾッヒストかも知れませんね』

『マゾッヒストて何？』

『戀の病の嵩じたのさ。貴女に對する强烈な愛は、尋常一樣な事では私の心を滿足させない。何か强い刺戟……この身体から血がポト〳〵流れるやうな刺戟を、貴女から受けたい、と云ふやうな心持がする。之が卽ちマゾヒズムです。獨逸の學者が命けた名で、惚た女から酷い虐待を受ける。それが非常に愉快だと云ふ病氣です。私は確にそれに罹つて居る』

夏彥が眞面目に語るのを喬子は諧謔とは思ひながらも、心の溶けるやうな氣持で聞いて居た。

（四三）

往來を挾んで置き並べた樹々の茂みが燃え立つカンラの燈に映らうて、三丁四丁と打つゝく林のさまは青い川のやう。白い衣裳もチラ〳〵見えて、水に浮く鱗介の瀨を切るやうに人の姿。夏の夜らしい爽やかな氣分は、この緣日の植木店から溢れた。

石に絡んだ姫蔦の水鉢を買つて、賑やかな町を後に、人通の寂しい小路に出た夫婦連らしいのが、睦じ氣に語つて行く聲が、四邊の寂しさにつれて高まる。

『植木の鉢を肩に乘つけて、奥樣のお供を仰付かつた体は、實に我なから殊勝なもんだね。オツと危ない、水が零れる』

『ほゝほ惡い姿態ねね。水まで持つて行かなくつたつて』

『水だつて値段の下さ。これ位ゐ細かくしなければ』

『ほゝほ急に世帶染たのね』

『當前ぢや無いか。暫らくは此呼吸で行くんだ。可いかい』

『それは妾だつてその氣ですよ。でも今夜は氣が咎めたわ。何だか顏を見られるやうだもの』

『顏ばかりぢや無いよ。髮が眞實能く似合つてる。それを皆が見たのさ』

『嘘でせう。妾あれだつたから。斯な束髮は嫌ひだつたもの』

『まあ當分はそれに極めて置くのだね。それから圖無しといふ髷を乘つける順序だ

邸へ歸る曉になると、又髮の結振なぞに種んな慣例が有る。今の中に充分好きな事をして置くさ』

『少々窮屈だつて構はない。妾早くその方にして欲しいわ』

『玉の輿だつて左樣一足飛びでは興味がない。此處まで漕付けて置けば焦るには及ばない。長くつて半歲だ男爵夫人の下稽古をして置たまへ』

『稽古が積んだわ、妾が邸へ入らうとする頃には、喬子さんに邪魔をされて、好い馬鹿を見るんぢやりますまいね』

『はゝはゝゝゝ又お定まりが始まつたね。喬子々々と喬子が何だ。今度の仕事で大概安心が出來さうなもんだね。お前を落籍した手腕を見ろ、ザツと積つて彼是一萬から上の物だ。喬子を種にあの眞島の因業爺から吐き出させたのは豪からう。左樣して此金は悉く右から左に何處やらへお納めしてありますよ』

『男は唐津夏彦。女は今は藝妓を廢めてお玉の本名で居る玉子であつた。

（四四）

玉子が藝妓を廢めたのはッイ此頃の事である。落籍した主は夏彦であつた。以前の屋形に遠からぬ浮世小路に、意氣な搆への妾宅を、夏彦は此頃の寓居として居る。

自分の作戰計畫は着々功を奏して居る。今度の次はいよ〳〵實家へ復歸れる段になる。それさへ成就すれば、お前を男爵夫人として迎へるのは譯の無い事である。藝妓から直と云ふのでは世間体もあるから、今暫時は華族の家の人となる稽古だと思つて呉れ。

夏彦は口癖のやうに斯云つた。玉子に取つては、出て居る間は男の詞が不安心でならなかつた。惚れた弱味で七分は折れたが、殘る三分は將來を心細かつた。夫が急に落籍の事が運び、今一息と云はして見れば、眼の前に玉の輿の据られた氣がする。氏の無い身を顧みて、獨り微笑れもするのであるが。唯一つの不安は喬子の事であつた。

彼女はお前と俺との仕事の道具で、お互の爲には幸福の神樣だと云ふ。事情を聞けばそれも左樣かと思はれる、子の愛に盲目同樣の父親に取入るのに、其娘を此方に手懷ける事は巧な手段であらう、實際此頃では眞島家の奥深く出入りして、その爲に莫大の金も手に入る、それは主人の秘密を握つた所爲もあるが、喬子を手に入れて居る賜物である、と云ふのも頷かれる、けれども手懷けると云ふことが、考へる程氣が廻る。喬子と夏彦に情交が出來て、それを知らずに居る自分は、飛んだ馬鹿な目を見せられるのではあるまいか自由の身になつた喜びと共に、慾が增して來るから不安も大きくなる、岡目には睦じい對座の繪にかいたやうな好い仲に、この問題で一寸波が立つ、その度に夏彦は斯う云つた。

『藝妓から一足飛びに男爵夫人になるのだ。其手段の爲なら少々は我慢するさ』

今夜も繰日の歸途に話がそれに落ちた。すると夏彦は例時の通りに『喬子が何だ』

で笑つて居たが、宅へ歸つてもお玉は頻に迫つた。

『妾何も素人臭い嫉妬なんか燒くのぢやないわ。お孃さんと情交があるなら有ると打明けて呉れたら、妾それを厭だつて云ふのぢや無いから。今更お孃さんと見かへられやうとも思つては爲いなからね。唯隱されると厭になつ了ふぢやありませんか』

夏彦は寢轉んで居たのを起直つて。

『左樣碎けて出られると、隱したのは俺が惡かつた。イヤ隱すも隱さないも無い。それ程の大した事件ぢやア無いのだ。喬子はお前の推重通りさ。けれどもそれは當初から豫定の行動なんだからね。情交と云ふと艶つぽく聞ゐるが、實は木か石を弄つてる氣だ。左樣だ。木か石で作つた蹈み段だよ。お前と俺との上り階段さはツはゝゝゝ』

お玉は默つて煙草を吹かして居る。

『少々我慢して貰ひたいと云ふのは此處さ。俺だつて隨分骨が折れる』

『ほゝほ何な骨が折れるのだか』

と煙管をポンと投る。

『馬鹿な。疑ふのか』

『疑ひもするわ。何なつて居るんだか、全然見當が付かないんだもの』

『それぢや眞島の家へ行つて見たら何だ』

『ほゝほ。そんな事が出來れば左樣願ひます。妾モウ手放しぢや出さないから』

『よし。それぢや喬子の方をお前に受持つて貰つて、俺は浩造に專ら當る事にしやう。其方が成功が早い』

『そんな事が出來ますかよ』

『出來る。見て居るが可い。智惠は無盡藏さ』

（四五）

梅雨の前觸のやうな鬱陶しい天氣が晴れて、日の光りがキラ〳〵する朝であつた夫藤三郎が商用に出た後で、お春は家の横手で張り物の手を働かせて居ると。其處へ立止つた男がある。

『魚藤と云ふのは此方だね』

『聲を掛けられて振向くと、濃い髭に頰を埋めた、逞しい巨漢だつたので。お春に被つた手拭を取つて。

『ハイ魚藤は手前でございますが』

『左樣か。藤三郎君は居ますかね』

『只今商用に出ました不在でございますが、あの何誰樣でございますか』

『俺かね。俺は一寸用事があつて來た者ぢやが』

と思案して。

『貴女は知らんぢやらうな、花枝と云ふ娘の事を』

『エ花枝？』

とお春は顏色を變へた。

『此娘の事に就て何か聞いて居られんかね』

『……イエ別に……』

と言ながらじろ〳〵と男の顏を見る。

『フム。まだ知れんのかね』

『あの貴方樣は何方から』

僧いと思ひつめた花枝の名を聞いて、お春は疑惑がムラ〳〵と生じた。

『イヤ不在なら又訪ねやう。花枝といふ娘の居所はまだ知れんのかと云つて、訪ねて來た男があると云ふて貰ひたい。邪魔をしたね』

と行かんとする。お春は氣色ばんで、その聲も震へて居た。

『あの手前の方は花枝つて云ふ女なぞにモウ關係はございません。そんな事でございましたら、來て戴きませんでも』

『關係が無い！、それではモウあの憐れな娘を……、左樣か、左樣云つたかね』

『ハイ、手前の方は魚屋渡世の其日暮しでございます。他所さんのお世話をする甲斐性なぞはございません、そんな御用でしたら妾からお斷りを致します』

『イヤ俺から頼んだ事ぢや無い、弱い者を助ける義俠心に感じたから、それで俺も一臂の力を貸さうと約したのぢやが、あれ程に云つたのに……』

『ハイモウ奇麗に關係は無いのです、そんな事を何時までも爲れて堪るものですかよ』

『貴女は何か間違へてや爲んかね、俺の尋ねるのは花枝と云ふ娘の事ぢや、まことに憐むべき境遇に居る婦人ぢやから、それに同情して世話をしたと云ふ娘の事ぢや』

『ほゝほ其世話はモウ手前の方では爲ないのでございます、先方さんが憐れなら、此方は何でございませう、間違はうたつて妾が押へたのですもの、動きはとれないのですからね、ほゝほゝゝ』

お春は憎々しう云つて彼方を向き、仕事を始め出した。

（四六）

詞ばかりか態度まで、彼方へ向けてモウ相手にならぬと云ふ狀を見せる無禮な振舞に、男は稍激した風であつたが思ひ反した如く、其儘何も云はずに歩み出した。お春は何やら口の中で呟きながら、其の後を見ぬやうにして見て居たが。忽ち入口の戸に恐ろしい音を立てゝ入つた。

男が二三間歩んだ時、そこの辻から現はれた老人がある。計らず顏を見合はせて。

『オ、島の旦那樣でねゑか』

『やあ藤吉さんか』

『旦那樣此頃些とも龍岡樣へお見ゑにならぬもんだで、御隱居樣とお噂ばかりして居ますだよ』

『左樣だらう、一寸此頃は隊の方が忙がしいからね、龍岡とは絶ねず手紙の往復は爲て居るが、何ぢや相變らず龍岡は半病人かね』

『ヘイ其事でございますだ、敬樣は半分で無ね全然病人でございますよ、御隱居樣の御憂慮は普通では無だけど、あの眞島樣の事件は悉皆旦那樣にお任せしてあるだからと云つてね……旦那樣、此邊へは何ぞ用事があるだかね』

『ウヽ、一寸用事があつて遣つて來たのじや』

と御堀は微笑んだ。

『俺敬樣の事に就て、一度旦那樣に逢ひたい思ふてゐたところだ、旦那樣俺が家ッイ其處だで、穢い所だが一寸寄つて下さるまいかの、俺内證で旦那樣にお頼みがあるだから』

『寄つても可がね、實は今お前の家で追はれて來たのだよはヽはヽヽ』

『ね、何と云はつしやるだ、旦那樣俺の家知つてるかね』

『知つてるよ、能く知つて居るのぢや、彼處の魚藤とした家ぢやらう』

『ほう妙だね』

『妙な事で知つてるのさ、知つてるから訪ねたのぢやが追出されたよはヽはヽヽ』

『何云はつしやるだ、不在には息子と嫁が居るだが、人樣にそんな失禮をする者で無んだ、旦那樣、少時で可いから寄つて下さいよ、皆が何と云ふて喜ぶだか知れねねだからね』

『寄つて行かう、が餘り歡迎されさうにも無かつたよ』

と云つて又笑つた、藤吉には何だか解りなかつたけれど、嬉しさうにホクホクして先きに立つて案内した。

『俺これで一月振で宅へ戻るのでございますよ、龍岡樣の方が自分の家見た樣な氣がしてね、夫でも偶には戻つて來ぬと、孝行な息子夫婦が心配するもんだでね、ホンの顏を見せに戻るのでございますよはヽはヽヽ』

老人の顏には親に優しい留守居夫婦の自慢が輝いた、それを美しい事に聞く御堀には、イヨ〳〵先刻のお春の態度が腑に落なちかつた。

（四七）

『お春や、歸って來たゝ、お客樣だよ。さあ旦那樣、斯んな穢い所だが上つて下さいましよ』

父の聲にお春は奥から急いで出て來た。

『お父さん、まあ長いこと歸つて來ないのねゝ』

と云ひかけ、父の後に隨いて座敷に通る客の顏を見て吃驚した。

『お春や、此旦那樣だよ、龍岡の敬樣のお友達の、それ始終お噂をした島の旦那樣だよ、早く御挨拶をするだ』

『……』

『はゝはゝゝ何を躊躇するだ、旦那樣、これは悴の嫁でございますよ、これが至つて孝行にして奥れますもんだで』

『やあ先刻は失禮』

と御堀は例の無頓着に、笑顏で云つたが、お春は挨拶所では無い、何と云つたか自分でも分らず、坐薄團を出して會釋をすると、逃げるやうに臺所へ、

『若い者と云ふものは埒こちのないはゝはゝゝ、旦那樣御免下さいましよ、魚屋の女房で、頓とお行儀が無ねだ』

『はゝはゝゝそんな事は無い……息子さんは居ないのかね』

『おゝ、お春や。藤三郎は商ひかの。左樣か〳〵。旦那樣、モウ直ぐに歸つて來ますだ。歸る時間でございますだよ。まあ緩り爲て下さいましよ。悴は世間へも出歩きますでな。少し位旦那樣達とお話も出來るだから』

『イヤその藤三郎君も知つて居るのぢや。俺とは仲の好い友達ぢやよ』

『へゝ……』

『其後俺も龍岡へ行かんから、其話をお前に爲る機會が無かつた。妙な事で、ツイ此頃知合になつてな』

「怜とでございますか。へゝ……」

と藤吉は意外の事で目を瞬る。

「藤三郎君からもまだ話は無かつたかね」

「へゝ。俺これで宅へ歸るのが一月振だでな、怜は龍岡様へは盆正月位にしか顔を出さんもんだで。左様でございましたか。して旦那様。何うして何處で怜が旦那様にお目にかゝつたのでございますだ」

「その話を爲るには、俺が今日お前の内を訊ねて來た用向を話せば分るお前は水野花枝といふ女の事を聞かなかつたかね」

「水野花枝……」

と藤吉は小首を傾ける、

「不在だつたら其事も知るまい、俺と藤三郎君とを結びつけたのは、水野花枝と云ふ女ぢや」

藤吉は膝を打つて。

「旦那様、その花枝と云ふのは、父親に捨られたる可愛想な孝行娘の事では無いだかね」

「あゝそれぢや、其娘の事を知つて居るのか」

「それだつたら怜が、ズッと以前に話した事があるだ、何でも正直眞法のお袋と若い娘兩人で、大富豪の父親に見捨られて、酷い難儀をして居るだで、見るに見兼て藤三郎が力になつてあげたいと云ふ話でございましただ。俺も涙が零れる話だで、そんな人を助けるのが男の役目だ。一番肩を脱いで上げるが可いだつて、話した事がございましたよ」

恰も藤三郎が歸つた氣勢。威勢の好い聲で。

「父さんが歸つた！、左樣かい。おい父さん今歸つたよ。父さんモウ宅を忘れたかと思つたせはゝはゝゝ」

（四八）

外から歸つた藤三郎を加へて、座敷は三人が鼎座なつて頻に話を續ける。憎い花枝の名を繰反して、漸く鎭まりかけて居た嫉妬の炎に薪を加へて去つた、胡散臭い男が父に連れられて又戻つて來た、ハッと思ふ間も無く、それが豫て父からの話で聞いた、友達思ひの深切な島御堀であると知つて、お春は疑ひ惑ふた、逃けるやうにして臺所へ來ると、夫が歸つて來て、待構たやうに喜び勇む、いよ〳〵坐ても立つても居られず、そつと次の室の話に耳を……』

『そんな事なら早く俺にも話して呉れば可いだに、まあ何といふ可愛想な事だか、それにしも何故汝に默々で轉宅したゞかね、それが俺合點が行かねねだ、のう旦那樣、左樣で無ねか』

『それぢや、其事は實に疑問ぢや、話に聞く通りぢやと、そんな事を爲さうな女ぢ

や無い、轉居先まで隱すと云ふのは、何か事情がありそうに思はれる』

と御堀の聲。

『實に悲慘な話ぢやから、俺も出來るだけの力を貸してやらうと思つた、それに島の娘と云ふのぢやからな、逢ふて種々聞きたい事もあつたのぢや、實に殘念な事をしたよ』

『私ア又旦那にも濟まねねと思つて、毎日商ひ片手に方々を探し歩いて居るのでございます、それに全く雲を摑むやうに、何處と云つて當が無ねのでね、實に弱つ了ひました』

『お前が預つて居る、花枝と云ふ娘と、眞島浩造との父子の關係を證明の彼の書付ぢやね、あれを浩造が奪はんとして、唐津夏彦にその手段を依頼して居る、と云ふ事は略想像される、それで夏彦があの惡漢共を使つて、お前を欺して誘き寄せ、强奪しかけたものだと云ふ事も分る』

『へェそれに違ひございません』

『忌々しい野郎だの、旦那様、其唐津たら云ふのは、眞島様へ出入の奴でございますかね』

『殆んど家族同様にして居る男ぢや。父は男爵ぢやが、非常の放蕩兒で、俺や龍岡と一緒に學校を出たのぢやが、不品行の爲に休職され、其後は實家は放逐されて諸方を放浪して居たのが、何うして眞島へ近づいたのか、此頃はあの邸へ起臥をして居る樣子じや、そればかりじや無い、龍岡と結婚する筈だつた令孃の喬子と……』

と云ひ掛け、躊躇する樣子で、詞が途切れた。

『その話は別に爲やう、そんな事もある。それから唐津が手先に使ふ銀次とか云ふ奴じや、あの男に就ても俺は調べなければならん事がある、何やら彼やらで、眞島の秘密を知る上にも、花枝と云ふ娘に逢へば好都合ぢやつた』

『汝そんなのなら一生懸命に探すが可いだ、商ひ片手で無ねで、そればかりにかゝるが可いだよ、龍岡樣の利益になる事で無ねか、それで無ねだつて、佛つくつて魂入れずだ。汝折角骨折つて、お袋に安神させて置いて、其儘に拋つて置いて死人に

對しても濟まねねだ。男ちうものは口約束だつて印判捺した證文と同じ事だ、のう旦那樣』

『それに或は唐津らの迫害の爲に、何うかしたのぢやア無いかとも思ふからね』

『俺もそれが心配でね、あれから家主や近所を又二度も三度も』

藤三郎の詞を遮つて。

『私は今日此家へ來て一寸變に感じた事がある、君の妻君は、あの花枝の事を知らんのかい』

御堀の聲に、立聞くお春はびくりとした

（四九）

妻のお春に花枝の事を告げたかと問はれて、藤三郎は頭を振つた。

『俺が此事を話したのは、旦那とそれから父さん限で、それと云ふのが母子の大秘密だから、決して他へ漏らして呉れるなと云ふ頼みだつたもんですからね。それに

相手が若い娘で、俺も氣の毒に思つてチョイ〳〵訪れるのでさへ、あの近所で妙に疑ぐりやがつて、變な噂をした奴があると聞いたので、詰らない邪推なぞ起されちゃ面倒臭ねと思つて、お春には一切沈默でございねますよ」

「左樣か」

と御堀はひとり頷いて。

「それは可かなかつた、夫婦の間に秘密を設けちや可ん」

「ナニ秘密つて事も無ねのですが、ッイ面倒臭ねので」

「イヤそれが爲に反つて、何でも無い事が面倒になつて來る。疑ひを招く例は能く有るのぢや、妻君に何かそんな樣子は無かつたかね」

「ヘイ別に……。至つて、我儘な奴ですから、年中小競合ひの絶ねた事はございませんが、其事で別に……」

御堀は默つて考へ込む。

「旦那樣お春が何か旦那にお話でもしたのでございますかい」

「イヤそんな事も無いが、疑ふてゞも居るのぢや無いかと思ふたからさ、はゝはゝゝ」

と笑ひに紛らした。藤吉が口を出して。

「旦那、嫁に惚つてそんな事はございませんよ。至つて精神の善い人間だで悴はあんな事を云つても嘘でございません夫婦喧嘩なんテ滅多に見た事は無ねだから」

「父さん、見つとも無ね止しねねな、旦那が笑つてらアはゝはゝゝ」

「眞の事で無ねか。俺嘘を吐く事大嫌ひだからねはゝはゝゝ」

「御堀は又何事か考へて居る。

「こんな事を云つてる間も、可愛想に母親には死別れる、父親には振捨られて、今頃何處に何して居るんだか、あゝ實にあの母子ほど氣の毒な者も無ねもんだ。父さん、俺は何にかして約束を果さなけれア、何も此良心が濟まねねんだ」

「だから俺云ふで無ねかよ。男が口から三寸出した事は、證文よりも大切だ。知れぬで引込んで男が立つもんで無ねだ。死んだお袋が手を合せて賴んだと云ふで無ね

か。汝頼まれただけの事は、何なに骨を折つても果すが當然だぞ」

「イヤ人の眞ごゝろは天を動かすと云ふ。弱い者にそゝく同情の力は岐度居所の知れぬ人にも或强い響きを傳へずには置くまい。今一層努力して、花枝と云ふ娘を探す事にしやう。其手段として」

襖が颯と明いた。御堀は詞を切つて振顧くと、轉ぶやうにして入つて來たのはお春であつた。驚く人々の前へ手を突くと、物は得云はず泣き伏した。

（五〇）

突然に座敷へ入つて來て、物も云はずに泣き伏したお春の有樣に、藤吉父子は驚いた、御堀の顏には偖はと何事かを合點した樣子が現はれる。

「お春何うしたゝ」

「突然に何だい、旦那の前へ」

と親と夫の聲を右左に、お春は先づ御堀の前へ手を突いて。

「旦那樣、妾貴方樣にお詫の致やうもございません、先程は飛んだ失禮な事を申上げまして……」

「イヤそんな事は搏はん。誰にでも誤解は有るものぢや、俺はそんな事を念頭には置かん、それよりも貴女は知つて居られるのかも知れんね、花枝と云ふ女の事を」

「ハイ……」

と云つたが、お春は面目無げに夫に對つて。

「お前さん堪忍して下さい、悉皆妾が惡かつたのだから……妾實に申譯の無い事をしました」

藤三郎は目をパチ〳〵させて、

「お春、手前氣でも違つたのじや無ゐか、何の事だか、手前の云ふ事は薩張り解らねゐ」

「……氣が違つたと云はれても仕方がありません。あの花枝さんが居くなつたのは

みんな妾が爲たことです、妾の所爲なんです」

「ね。手前が？」

「お春、汝花枝チウ人知つてるだかね」

「お父さん、妾何うしたら可いでせう、妾淺はかな考へから、皆樣に御迷惑をかけて……」

「お春、手前が花枝さんを何うしたと云ふのだ、それを早く云へッ」

と藤三郎は急き込んだ。

「……飛んだ思ひ違ひから、妾花枝さんに逢ふて、散々に云ひたい事を……」

「花枝さんに逢つた？、手前がゝ」

「モウお前さんに逢はないでお呉れ、決して寄せて下さるなと……妾恥かしい事を……恥かしい事を云ひました」

と俯向いた。

「あゝお春、汝思ひ違ひをしたゝね！

「その爲に花枝さんは、屹度愛を隱したのでせう、それに違ひありません妾花枝さんにも……」

「お春ッ、手前ふざけた眞似をッ」

と云ひさま、藤三郎は女房に掴みかゝらうとする、其手を御堀が押へて。

「イヤ此誤解は君が基をつくつたのじや、隱した爲に疑ひを招いたのじやから仕方が無い。妻君は君を思ふの餘りに爲た事じや、亂暴を爲ちや可ん、それよりも能く話を聞いて見るが可い、貴女一應その話をして下さらんか」

お春は隱さずに云つた、母親の死去を告げに來た使ひの者で、始めて花枝と云ふ娘の事を知り、その女と夫との間に秘密の關係があるらしう疑つて、そつと訪ねて行く途中、近所の人の口からイヨ〳〵それと確めたので、前後の思慮なく押掛けて行き、怨みつらみの數々を云ひ並べた上で『モウ再び決してお目にはかゝりません』と誓つた花枝の詞を握つて歸つたことを、悔の涙と共に語つた。

偖は其爲に消ねるが如く身を隱したのかと、母に別れて唯ひとり、行衛定めぬ孤

一七六

兒の、漂浪の影もうら寂しう、さまよひ出た花枝の姿を、人々は目に描いて顔を見合せた。

雲續編

羽様荷香君作

「命」　全參册
「武士系」　全
「男」　全四册
「電」　全參册

右いづれも樋口隆文館の滿版に御座候

雲（續編）（終）

◉樋口隆文館
營業案内

△樋口隆文館は主として小説の出版……及び其卸賣を專業と致居候に付各地方の販賣業者諸君……及び貸本を營業とせられる諸君は多少に拘らず御注文被下度候

△卸賣目錄御入用の諸君は郵券參錢御送り被下度候其節には販賣用としてなるや又は貸本用としてなるや御書き添へを願ふ

△樋口隆文館は毎月三四種宛は缺さずに新版發行致べく候

△樋口隆文館は東京版でも大阪版でも小説なれば何でも一切取り揃へ居候

△樋口隆文館の所在地は大阪三休橋鰻谷南入西側に御座候、振替番號は大阪八七九七、御注文の節には代金郵送料共總て御前送相成度候着金後にあらざれば一切送本仕らず候大部數の御注文にて汽車便又は汽船便其他成丈け早く届く方法を以て御送品可致候

大正四年十二月十　日印刷
大正四年十二月十五日發行　（定價金五拾錢）

著作權所有

雲續編

著者　羽様荷香
發行者　大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷　樋口源次郎
印刷者　大阪市西區新町北通一丁目五十番地　河上貞次郎

發賣元　大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側　樋口隆文館
（編輯口座大阪八七九七）

島川七石君作　山本英春君畫

戀のしがら み

全三冊

木版手摺極彩
美人挿畫附
定價各一冊五十錢宛
送料各一冊六　錢
全六冊一時に御注文の方に限り送料共に
特價　貳圓五拾錢
（但し內地限り）

蘭子と信吉

全三冊

本書は、著者が一代の心血を傾注して創作せられし一大雄篇にして、其內容たるや、主人公は健實なる志想を抱いて帝都に苦學する一青年を以てし、此快男子に配するに、可憐なる麗人、失戀の令孃、奸譎憎むべき賣國奴、刺客、女優、老政治家、歌妓、亡命の志士、不良青年、變裝刑事、其他社會に在らゆる階級の人物をば、舞臺の變化と共に活躍せしめて、以て讀者を起伏重疊たる情海の波瀾の中に捲き込まんとする、眞に近來稀に見る良家庭小說にして、又絕好の立志的戀愛悲劇小說である、乞ふ愛讀を賜はらん事を。

江見水蔭君作　八幡白帆君畫

中央新聞掲載小說

大正五人女

全五冊

木版手摺極彩
挿畫美人附
定價各一冊五十錢宛
送料各一冊六錢宛

全五冊一時に御注文の方に限り送料共に特價金貳圓（但し內地限り）

本篇は約九ケ月の長期に亘り、東都中央新聞に掲載せられて空前の好評を博し、中外數十萬の讀者をして心醉歡喜しめたる一大活劇小說にして實に過去に於ける數多き水蔭先生の作物中にても拔群傑出せる最長の雄篇である。

編中に活現する女の種類には、女優あり、藝妓あり、猛獸使ひの女あり、富豪の奧樣あり、墮落女學生あり、賢夫人あり、薄馬鹿女中あり、淫婦、毒婦、菩薩、夜叉、個々入り亂れて興味深き大活動をなし舞臺の變化幻奇妙怪を極めた、近來稀に見るの面白き小說である。

江見水蔭君作
八幡白帆君畫

中央新聞
掲載小説

三怪人

怪賊の一團あり、其行動の幻奇妙怪なる、實に神沒鬼出にして、暮顯朝晦捕捉するに難く、而其犯行の陰險兇猛なる、空前未聞の深刻惡辣を極め、近時有名なりしヂゴマ、ポンノーの徒輩をしても、遠く三舍を避けしむる程である、彼等を獲んが爲に我探偵界の巨人は、如何に戰慄すべき惡爭苦鬪を經たか、其處に讀者の心血を衝動すべき、骨を刳り肉を剔む的の痛快壯烈なる消息がある、此怪奇絶妙の事實を寫すに、老巧練熟せる水蔭先生の靈筆をもつてす、洵に稀に見る近來の活小説であると隆文館の主人が敢てお奬めをする。

各冊共木版
極彩色密畫挿入
全四冊各一冊
實價金四十五錢宛
送料四冊ニ付八錢
但シ内地限リ

島川七石君作
八幡白帆君畫

悲哀小説

罪

全二冊
美術木版口繪挿入
各一冊實價五拾錢宛
送料二冊ニ付金八錢

奇怪なる犯罪事件である。帝都劇壇の花とたゝへられし、佳麗妙齡なる一女優の手によつて世にも恐るべき殺人の大罪が犯されんとした、其裏面には、必ず何か陰れたる大なる秘密が無けねばならぬ。そも犯罪の動機は何、戀か、嫉妬か、否、戀にあらず、嫉妬にもあらず、其處に同情の涙を誘かしむる悲痛凄慘なる、且美しき物語があるのだ。

新田静湾君作
谷洗馬君畫

立志小說 富の力

各冊共木版
極彩色口繪挿入
全三冊
實價各一冊四十五錢宛
送料三冊ニ付八錢

猛虎と見ては石に箭の穿ちし故事もある、精神一到何事をか爲し得ざらめやと、一朝、富の力の壓迫の大なるに感奮して、猛然志を立てゝ故郷の地を去り、帝都に出でたる水呑百姓の子伜は、僅々十年の短日月の間に、能く百萬圓の大富豪と成り得た、彼は如何なる手段方法にて此富を得たか、如何に奮闘努力して此富を得たか、彼をしてかく發奮せしめたる動機は何、其處に讀者を感動せしむべき血と涙との物語があるのだ。

大阪新報記者
行友李風君作
山本英春君畫

龜甲組

（木版極彩色頗美本）
全三冊
實價各一冊金五十錢
送料一冊ニ付六錢
三冊ニ付八錢

本書は大阪新報紙上に連載して大好評を博せし事實小說であつて、事は明治貳拾壹年に起り、當時、京都、三重、滋賀、奈良の一府三縣の警察界を騷がせし陰慘凄愴なる一大虐殺事件である、編中に動活する人物には、剛俠不敵の壯士あり、出沒不思議の怪賊あり、泣血苦節の美人あり、薄命可憐の處女あり、個々入り亂れて各有趣味の大活動をなし、一讀骨動き肉を躍らしむべき、血も涙もある生きた面白い小說である。

渡邊默禪氏著　長谷川小信氏畫

事實小說　怪の怪　全二冊

表紙口繪共極彩色美本
實價　各一冊　四拾五錢
郵税　各一冊　六　錢

これは默禪子が方寸より描き出した。虛構架空の小說にはあらず。由緒正しき東北の名家として其名を知られし黑石子爵「憚つて假名を用ゆ」家に於ける。家庭大混瀾の眞相を描寫した。奇々怪々なる事實譚であつて。篇中に活動する人物には。表に忠義の假面を被り。そして腹中には恐るべきの大野心を包んで。御家を橫領せんとする野心家も在れば。マンマと若殿を掌中に丸めこんで。スンデニ大仕事を爲遂げんとした。外見は佛菩薩のやうに優く。而その實は夜叉鬼神よりも辣腕物凄い怪美人も居る。車夫に連れ出される可憐の孃樣もあれば。好いた藝妓と手に手を執つて。落人と洒落玉ふ貴公子もあらうといふ。至極面白い怪小說でございますから是非一度は讀で見て下さいと。隆文館の主人がお願がいたします。

222
450

終